
D・C?なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士

京勇樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C?なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士

【Nコード】

N4465Y

【作者名】

京勇樹

【あらすじ】

1年中桜が咲く初音島、ここでは現在最先端技術で魔法と科学が取り入れられて、デバイスが普及していた
そして少年には暗く悲しい過去があった、少年は裏の世界で生きて戦っている

- 少年は幸せに生きられるのか？ そして誰が少年を救えるのか・・・

ブログ始まり(前書き)

やっちゃまった感、リミットブレイク限界突破!!
でも後悔してません!!

一部変更しました

プロローグ始まり

朝6時30分に俺、防人裕也たみもりゆうやは目覚ましの音で起床した

裕也「さてと、エリオとキャラの分の朝食を作らないとな」

俺は学校の、風見学園の制服に着替えてから自室を出て居間の右隣にある仏間に入って仏壇を開けた

裕也「おはよう、お父さんお母さん、そして美樹みき」

仏壇に線香をつけてから俺は手を合わせて挨拶した

そこには2枚の写真があり、右の写真には俺の両親の防人幸也たみもりゆきやと母親の防人彰子たみもりあきこの写真があり

左側には大体小学3年生くらいの女の子が映った写真が、名前は防人美樹たみもりみきと言う

俺は仏壇を閉めて、台所に入り冷蔵庫を開けた

裕也「今日はスクランブルエッグにするか」

俺は冷蔵庫内から材料を散りだして手早く調理し、俺のを含めて3人分用意してから時間を確認した。

裕也「ふむ、7時10分かそろそろ2人を起こすか」

俺は2人が寝ている部屋に向かう

俺達3人が暮らしているのは共栄住宅のアパート、まあ所謂団地だ俺は”エリオとキャラの部屋”と書かれたドアを開けると

裕也「ほれ、エリオにキャラ、そろそろ起きろ、今日は2人とも日直なんだろ？」

と寝ている義息子と義娘をゆすつて起こした

エリオ「うー、おはよう義父さん」

と赤い髪の毛をショートカットに切りそろえた男の子で名前はエリオ・モンディアルが眠そうに起きると

キャラ「おはようございます……」

2段ベッドの下の段で寝ていたピンク髪の小柄な女の子が髪の毛がぼさぼさの状態で起きた、名前はキャラ・ル・ルシエと言う

この2人は俺がとある理由から助けて引き取った子供で現在9歳で、風見小学校に通っている

裕也「ほれ、ご飯できてるから、顔洗って着替える」

2人「はい」

2人の返事を聞いてから俺は台所に戻った

2人が来たのはそれから約10分後だ

3人「いただきます！」

俺達は3人揃ってから朝食を食べ始めた

エリオ「ねえ、義父さん、今日はバイトあるの？」

エリオがお皿に盛られたスクランブルエッグを食べながら聞いてきた

裕也「ああ、だから今日は何時も通りにリンディさんのところで夕食だな」

リンディさんとはフルネームをリンディ・ハラウンと言い両親が死んでから1番世話になってる人だ

同じアパートの上の階に住んでおり、俺がバイトで遅くなる場合は2人を預かってもらっている

2人「わかった」

そんな生活に慣れた2人は返事をしてくれた、・・・なんか申し訳ないな

そして朝食を食べ終わり食器を流しに浸けると

裕也「食器はそのままにしておけ、帰ったら洗うから」

と俺は言い

裕也「そんじゃ、学校に行きますか」

2人「うん！」

2人は部屋にランドセルを取りに行った

俺達がすんでるアパートは風見学園にしても、風見小学校にしても距離がある

俺は既に昨夜用意しておいた指定カバンを持った時だった

ピンポンとチャイムが鳴り

？「裕也、時間だよ？」

とかわいらしい声が聞こえた

裕也「ああ、わかったよ！」

俺はドアの向こうに聞こえるように返事し

2人「準備完了！」

と言ってランドセル（エリオが青でキャロがピンク）を背負って玄関まで来た

俺は2人を確認すると

裕也「それじゃあ、行きますか」

と言ってドアを開けると

？「おはよう裕也」

と先ほどと同じくかわいらしい声の本人が目の前にいた

裕也「ああ、おはようフェイト」

目の前の少女は太陽が跳ね返るような金髪に赤い眼をした美少女と言える子で名前はフェイト・T・ハラウンと言い俺の幼馴染だ

フェイト「エリオとキャロもおはよう」

とフェイトは俺の後ろに居た2人にも挨拶した

2人「おはようございます！ フェイト義母さん！！」

義母さんというのはこの2人を引き取る際に俺だけでは無理だったのでフェイトに名前を貸してもらったのだ、だから名義上は俺とフェイトの子供と言うことになる

フェイト「うん、おはよう、あ、そうだ裕也、はいお母さんからお弁当だよ」

とフェイトは左手に持っていた青い包みのお弁当を俺にくれた

裕也「毎度ありがとうな、リンデイさんにもお礼言っといてくれ」

フェイト「ううん、いいのお母さんは好きでやってるみたいだし」

俺は貰った弁当を持って

裕也「それじゃあ今日も1日元気に過ごしましょー！」

3人「うん！（はい！）」

こうして俺達の1日が始まった

プログラグ始まり（後書き）

さてと作者の思いつきで始めましたが
がんばって書きますか

設定 (11月18日追加) (前書き)

今回は主人公と主なキャラの設定です

アリシアのデバイスの名前変えました
杉並と高坂まゆき、天枷美夏、高町なのは、ユーノ・スクライアを
追加しました。

主人公の設定に追加アリ

設定 (11月18日追加)

防人 裕也^{なつき}、風見学園付属3年3組に所属している学生で身長は176cm

体は全体的に細いが痩せている訳ではなくかなり鍛えられている、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエを養子として引き取っていて育てている、生計は両親の遺産とバイトとある仕事でまかなっている

髪は黒く後ろだけ背中位まで伸ばしておりそれをヘアバンドで纏めている

顔立ちは丹精だが左目に傷と、と”ある物”を隠すための眼帯を着けている、右目の瞳の色は黒

同じアパートにはクラスメイトの沢井 麻耶^{なま}と幼馴染のフェイト・T・ハラオウンと先輩の高坂まゆき^{たけさか}が住んでいる

使用デバイスはインテリジェンスデバイスの阿修羅^{あしゅら}、モードは高機動を主体に近接格闘戦と近接戦闘、遠距離戦闘が可能なオールラウンダー、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは両肩に侍の肩当と両手と両足に侍の鎧のような手甲と脚甲を装備しておりそれ以外は制服そのままの格好になっている

本人が使う魔法はミッドミチルダと古代ベルカと本人の家のためか特殊な陰陽術、及び西洋魔法を使う、更に本人の空間魔法で複数の日本刀^{レアシキル}を所持・封印している
希少技能、魔力の全属性変換資質

フェイト・T・ハラオウン、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は太陽の光が跳ね返るような金髪で瞳の色は赤、身長は一般的な

女子と同じ位でプロポーションはかなりのもの
双子の妹で姉にアリシア・T・ハラウンが居る

兄は名前はクロノ・ハラウン、風見学園の風紀委員で副委員長の
役割を受け持っている

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのバルツディシ
ユ・アサルト得意なのは主に高機動近接戦闘、カートリッジシステ
ムを搭載している

バリアジャケットはリリカルなのはを参照

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

レアスキル
希少技能、魔力の雷変換資質

桜内 義之、やぐらいつよしゆき風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒でショートカット、瞳の色は少し茶色がかった黒

本人の意思とはまったく関係無しに風紀委員にブラックリスト入り
されている

両親は不明、養母は風見学園の学園長の芳野さくらよしの

隣の家の朝倉家とは昔から家族同然に育っているために生徒会長の
朝倉音姫あさくひのおとめには弟くんと呼ばれ、音姫の妹の朝倉由夢あさくひのゆむには兄さんと呼
ばれている

使用デバイスはインテリジェンスデバイスの桜花おうが、得意なのは高機
動近接格闘と遠距離砲撃戦、カートリッジシステムを搭載

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

レアスキル
希少技能、未来予知（限定的）と魔力の桜の花びらへの変換資質と
お菓子（和菓子限定）の構成

アリシア・T・ハラウン風見学園付属3年3組に所属している学生
髪はフェイトと同じ金髪で瞳の色は水色

身長は一般的な身長でプロポーションは完璧

双子の姉で妹はフェイト・T・ハラウン

兄の名前はクロノ・ハラオウン
使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのアテナ、得意なのは高機動近接戦闘と中距離砲撃戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは蒼い着物みたいなジャケット（イメージ的にはガンダムSEEDのラクスが着ていたもの）

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

レアスキル希少技能魔力の雷への変換資質

すぎなみ杉並、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒瞳の色も黒

身長は約171cm、運動神経抜群、頭脳明晰とかなりの能力を誇るが風見学園切つての問題児

非公式新聞部なる部活（？）に所属しており、イベントの度に何かしらの行動を起こす困った奴、しかも大抵が義之を巻き込む為、義之もブラックリスト入りされた。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのテストメント、得意なのは高機動近接格闘戦と遠距離砲撃戦闘でカートリッジシステムを搭載している。

バリアジャケットは黒い西洋鎧の身体の部分が無い状態で有るのは手甲と脚甲と肩当程度で背中には膝丈まである黒いマントが特徴

使用魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

レアスキル希少技能魔力の闇への変換資質

こしひか高坂まゆき、風見学園本校2年3組に所属している学生

髪は藍色、眼の色は茶色

身長は161cmと女子にしては少し高い様子、運動神経が抜群で陸上部に所属しており得意なのは走り高跳びだが陸上競技全般で高い成績を保持している、尚生徒会副会長も兼任しており半ば杉並専門の追跡者となっている、尚義之、杉並、涉、杏、が同じクラスな

のは彼女が学年主任に提案したからである。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのエクスカリバー、得意なのは高機動近接格闘戦と中、近距離戦でカートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは白いジャージ状で身体の側面と正面に青い線が入っており、足には移動力強化のためか脚甲にローラースケートが着いている

使用魔法は主には近代ベルカだが時々ミッドミチルダも使用する
レアスキル
希少技能魔力の風属性への変換資質

あまかせみなつ
天枷美夏、風見学園2年1組に所属している学生

髪と眼の色は青で統一されている

何時も牛柄の帽子を被っており首には赤いマフラーを巻いている、人間ではなく2059年より約50年前に製造されたロボットのプロトタイプで本来は2059年に起きる予定ではなかったが、杉並と義之によりの偶然の行動（主には義之だが）により起動した、過去のとある理由により人間嫌いに陥っているが本来は優しく素直な子、義之たちを基本的には呼び捨てにしているが、ある理由により杏だけ先輩と慕っている。尚性能上どうしても8時間に1回バナナを食さねばならない、本人はバナナが嫌いと言語しているが本当は好き。

使用しているデバイスはかなり特殊なストレージデバイスのクロス（ギリシヤ演劇のバツクコーラスより）、本来はインテリジェンスデバイスだったが搭載予定だったAIのMIAKIというAIが何故かきちんと起動せず、まるで本来の主を待っているように沈黙を保っている。

美夏のAIとリンクするためある意味、美夏自身がインテリジェンスデバイスとも言える。

尚美夏には当時の技術では人工リンカーコアが再現できなかったため本来は魔法は使えないが、クロスに特殊なシステムが搭載されて

おり周囲の魔力を吸収して魔法を使用できるようにした。

バリアジャケットはなのは本編のナンバーズと同じようなインナーが展開され、その上に白いジャンパーと白い半ズボンを纏い手と足に肘と膝まで覆うような手甲と脚甲が展開する、尚脚甲の足首部分には紺色の6角形の寶石状の物体が埋まっており「ウイング・ロード」が使用できる、のと脚甲にはローラーが着いている

両手甲の部分には左右3つずつ小さい珠が埋まっており美夏本人が視認した魔法を左右3つずつ、合わせて6個ストックできるし、1度見た魔法は構築に時間が掛かるが構築可能

尚更に特殊なシステムでカートリッジシステムが搭載されており、ストックした魔法を本来魔力を圧縮する薬莖に圧縮して保存することが可能になっていて、圧縮した魔法により色が違い見間違えないように薬莖の側面には魔法の名前が記載される、尚圧縮するための薬莖を入れる場所は手首の部分に3発ずつ入れる事が可能で、発動するためには薬莖を手首から外して肘の内側の穴に入れる必要がある。

更にフルにストックした魔法を使用及び圧縮しないで新しくストックしようとした場合古くストックした魔法から消えていく

得意レンジ無し、あえて言うならば魔法を構築する時間が稼げる遠距離が得意、しかしあまり遠すぎると視認できなくなるためどうしても近づく必要がある

得意魔法及び稀少技能無し

たかまち
高町なのは、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は栗色で眼の色は黒に近い灰色

身長は平均的

明るい性格で不屈の心を持っており、通称「エース・オブ・エース」と呼ばれている

因みに「悪魔」や「魔王」、「冥王」等と呼ばれるときれて言葉が片言になる

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのレイジングハ
ート・エクセリオン

バリアジャケットはなのは本編を参照
カートリッジシステムを搭載している

得意なのは中距離と遠距離砲撃と超遠距離精密砲撃で他のキャラに
比べると機動力は劣るが防御力が高い

使用魔法はミッドミチルダのみ

レアスキル
希少技能無し 追記魔力の総量は事実上測定不能状態らしい

ユーノ・スクライア、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は金髪で眼は緑色

身長は170cmくらい

優しい性格で押しに弱いが成績はトップクラス

尚付属生でありながら名誉図書委員と言う肩書きを得ており、理由
としては本校と付属にある2つの図書館の膨大な蔵書中から指定さ
れた本を1発で発見できる特殊な検索魔法を有しているから

変身魔法でフェレットにもなれる

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのハイペリオン、
カートリッジシステムを搭載している

高機動中距離と同遠距離砲撃が得意

バリアジャケットは西洋騎士の軽装鎧で色は白と青のツートンカラ

ーで左手に大きさが変更できる楯を保持している

使用魔法はミッドミチルダのみ

レアスキル
希少技能無し

設定 (11月18日追加) (後書き)

この設定はちよくちよく更新します

騒がしい朝の風景（前書き）

裕也「さてと義之は起きてるかな？」

騒がしい朝の風景

フェイト「今日も義之のところに行くの？」

フェイトが曲がり角のところまで聞いてきた（エリオとキャロとは既に別れている）

裕也「ああ、まあ恐らく既になのはか由夢ちゃんか音姫さんが行ってるだろうけどな」

今言った3人は義之こと桜内義之の幼馴染だ

特に由夢と音姫の2人は兄妹同然に育った仲だ

そんなこんな言ってる内に義之の家の前に到着したら

由夢「兄さんいい加減に起きてください！」

という声が聞こえた

裕也「おーおーやってるね」

フェイト「裕也そんな暢気に言ってるいいの？」

と言った瞬間だった

なのは「由夢ちゃんどいて！」

裕也「ん？」

フェイト「なのは？」

やっぱりなのはも居たようだ

由夢「ちょ！？ なのは先輩それは流石にマズい！！」

由夢よ少し言葉づかいが怪しくなってるぞ

なのは「全力全開！ デイバイン・バスターー！！」

と聞こえた瞬間桜色の光が義之の部屋の2階の窓を埋め尽くした

義之「ギャーーーーー！！！！」

義之の悲鳴が！！

裕也「……………」

フェイト「……………なのは」

俺は啞然としてフェイトは米神を押さえながら唸るしか出来なかった

10数分後

義之「なのは！ お前は俺を殺す気か！」

俺達は学校に向けて走っていた

なのは「素直に起きない義之君が悪いんだよーだ」

フェイト「いやだからってディバイン・バスターはやりすぎだよ、
なのは」

なのは「起きたんだから結果オーライ！」

裕也「それで殺されかけたんじゃ割に合わないぞ」

と言ってるうちに

由夢「ここまで来れば大丈夫ですね」

着いたのは桜公園だった

ここ桜公園は1年中桜が咲く初音島でも1番桜の木が植えられている場所だ

清掃業者曰く「ここがあれば俺たちは安泰だ」らしい

何でかと言うと桜の花びらの回収だけでも1年中暇が無いからだ

因みに今の季節は冬だ、季節感もへったくれもない

と歩いていると校門が見えたが

義之「なんか騒がしいな」

なのは「だね」

そう学校のほうがなんか騒がしいのだ

？「はっはっは！ 捕まえてごらんさーい！」

その原因は今分かったが

裕也「杉並か・・・」

義之「あいつはまた・・・」

杉並とは学園に存在する非公式新聞部なる団体を率いているいろいろト
ラブルを起こして本人曰くイベントを面白くしている困った奴だ
フェイト「どうする裕也？」

裕也「行くか一応俺達も非常要員とはいえ生徒会なんだ」

フェイト「わかった」

俺たちはカバンを開けて中から生徒会を示す腕章を取り出して右腕につけた

フェイト「じゃあなのはカバンお願いね」

裕也「義之頼んだ」

俺とフェイトはカバンと弁当を預けると走り出した

？「杉並ー待てー！」

フェイト「まゆき先輩！」

裕也「援護に来ました！」

まゆきとは本名、高坂まゆきこうさかといい生徒会副会長であり風紀委員会の委員長でもある通称生徒会長の懐刀だ、因みに会長は音姫さんだ裕也「つてデバイス展開してるし」

杉並「ちい剣使い《ソードダンサー》に優しい閃光が来たか！」

杉並は既にインテリジェンスデバイスのテストメントを展開していた黒い装甲に黒いマント手には短刀型のアームドデバイスを持っていた因みに剣使いに優しい閃光とは俺とフェイトの渾名だ

裕也「仕方ない、阿修羅セットアップ！」

俺は右手首の腕輪を前に突き出しながら言った

阿修羅「承知！」

フェイト「バルディッシュ！ セットアップ！」

フェイトは黄色の三角形のペンダントを手の上に乗せながら言ったバルディッシュ「イエス・サー」

次の瞬間には俺たちはバリアジャケットに包まれていた（詳細は設定をご参照ください）

俺の両手には刀型のアームドデバイスが2本あり、フェイトは右手に鎌を彷彿させる杖を持っていた

まゆき「準備完了したら突撃！行くよエクスカリバー！」

エクスカリバー「了解」

エクスカリバーはまゆき先輩のインテリジェンスデバイスで待機形

態はネックレスの白い宝石状で展開すると両刃の大剣になるバリア
ジャケットは白を基調として青いラインが入ったジャージとマント
と手甲だ

裕也&フェイト「了解!!」
俺達が突撃すると

?「あかん! フェイトちゃんに裕也君まで来たんか!？」

この声は……

フェイト「はやてまで……」

はやてこと、八神^{やがみ}はやてがそこに居た

既にはやてはリイン?とユニゾンした姿になっていた(詳細はなのは本編を参照)

杉並「同志八神よ撤退だ!」

はやて「了解や!」

と2人が逃走しようとしたとき

?「ウイング・ロード!」

と聞こえて青と白の帯状の道が逃走する2人まで伸びた

フェイト「これは」

裕也「スバルにギンガさんか!」

スバルとギンガとは風紀委員会に姉妹で所属している本名はスバル・

ナカジマとギンガ・ナカジマと言う

2人も既にバリアジャケットを展開して身にまとっている(詳細は本編を参照)

スバル「裕也先輩にフェイト先輩おはようございます!」

スバルは相変わらず元気だ

ギンガ「裕也君にフェイトさんおはようございます」

裕也&フェイト「おはようございます!」

俺達が挨拶すると

なのは「うわー」

義之「派手にやってるな」

由夢「本当ですね……」

どうやら歩いてきた義之たちが来たようだ
と義之たちの方向を見た杉並が

杉並「むう！ 風見学園の白い魔王が来たか！！」

杉並となのは以外「「「「あ」「」「」

言ってしまったなあ馬鹿・・・

なのは「・・・・・・・・イマナンテイタ？」

終わった！ なのはの背後から黒いオーラが見える！！

裕也「総員退避ー！！」

俺は全力で叫びながら全速力で杉並たちから離れた

なのは「スコシアタマヒヤソツカ？」

なのははそう言いながらバリアジャケットを纏いとある魔法の準備
を始めた

はやて「ちょよ！？ ウチまで巻き込みかいな！！」

裕也「ちい！ 間に合わないな！！ フェイト、スバル、ギンガさ
んこつちに！！」

俺は両手に持っていたアームドデバイスを腰に装着すると右手を左
の腰の辺りにもっていき

裕也「来い！千歳の輩雷切！」

俺の手には帯電した刀が握られていた

裕也「間に合え！」

俺は雷切を地面に突き刺して呪文を唱えた

裕也「五雷神君の奉勅、五雷神君の天心下り、十五雷の正法を生ず

！ 邪怪禁呪、悪業成す精魅、天地万物の理をもちて微塵と成す！

！ 十五雷正法十二散、禁！」

雷切から凄い雷が走りそれが俺達を囲む壁になった瞬間だった

なのは「全力全壊！ スターライト・ブレイカーー！！！」

はやて&杉並「「ギャー！！！！！！」

杉並とはやての悲鳴が響いた、って！ 学校の校舎になのはのスタ

ーライトブレイカーが！！

音姫「アイギス！！！」

どうやら学校の校舎は音姫さんが自身のインテリジェンスデバイス
のアイギスで護ったようだ

そして閃光が収まるとグラウンドは死屍累々の状況でクレーターが
出来ておりクレーターの真ん中にははやてだけが倒れていた

裕也「杉並には逃げられたか・・・」

俺はため息をつきながら言った

裕也「皆無事か？」

俺は後ろにいた全員と腕に抱えていたフェイトに聞いた

フェイト以外「私は大丈夫ですが、フェイトさんが・・・」

裕也「へ？」

俺は腕の中にいたフェイトを見た

フェイト「・・・（顔真っ赤）」

フェイトが顔を真っ赤にして固まっていた

裕也「おわ！？ フェイト！！？？」

俺はフェイトを揺さぶったが反応は返ってこなかった

こうして俺達の1日は始まったのだった

騒がしい朝の風景（後書き）

裕也「フェイト、大丈夫か？」

フェイト（まだ顔を赤くしながら）「うん、大丈夫……」

名前と能力募集（前書き）

今回は募集です

名前と能力募集

此度は私、京けいゆう樹きの力量不足（？）とイメージ不足により天あま枷かせ美み夏なつとエリカ・ムラサキ両名のデバイス名と能力が決められないので皆様に募集させていただきます

使用者

デバイス名

バリアジャケットの形の詳細（武器か杖の形含めて）

使用魔法

得意レンジ

カートリッジシステムの有無

インテリジェンスデバイスなのかどうかも書いてください！

あるなら変形時の形とパターン数

を書いて応募ください！

皆様この哀れな作者をヨロシクお願いします！！

応募待っています！

名前と能力募集（後書き）

作者「お願いします！ors」

裕也「この哀れな作者をお助けください

」

選択 前編（前書き）

裕也「今日の沢井はなんか迫力あるな」
フェイト「あれが決まってるからだよ」

選択 前編

裕也 side

俺たちは今、LHR、ロングホームルーム まあ平たく言えば委員会決めとかのあれをやっていた

麻耶「皆さんもご存知の通り、来週の23日から25日までの3日間」

教室の1番前の教卓にわれらが委員長の沢井麻耶さわいまやが立っている
と鈍い音が聞こえたので左後ろを見ると、先ほどまで居眠りしていた義之が顔面を机に打ち付けていた

麻耶「我が校でクリスマスパーティーが催されます」

義之は状況を確認するためか周囲を見回している

麻耶「クリスマスパーティーですが、言ってしまうえば文化祭と変わ
りません。各クラスでの催し物が義務付けられています」

どうやら義之は状況を把握したのかももう1回寝ようとしたら

麻耶「しかあし！」

と沢井が教卓を強打したので、びっくりして起きた

義之「うわっ、ビックリした」

アホか

前では沢井がギリギリと忌々しそうに握りこぶしを作りながら俺達
を睨んでいた

義之は怖いのか少し背中が反っている

麻耶「残念なことに、私達のクラスの出し物は未だ、何も決まってい
ません！」

そうなんだよね

麻耶「この議題、LHRで11月からしているのにもかわらず」

俺達だけじゃね？

杉並「桜内さくうち、桜内」

どうやら義之の左斜め後ろに座っている杉並が声をかけたようだが

義之「ん？」

義之は視線だけを動かして聞いたらしい

杉並「今日の委員長いつにも増して殺気だっている。居眠りしているとそのまま永眠させられるぞ」

それは流石に言いすぎでは？

？「マツチ棒かなんかで、まぶた瞼支えとけ」

と言ったのは義之の後ろに座っている男子で名前はいたはしわたる板橋渉という
つてか普通持つてねーよ

義之「マツチ棒、持つてない」

当たり前だ

渉「じゃー、ほら。シャーペン」

眼が飛び出るぞ

義之「おー……、つてデカイわっ。眼球飛び出るわ」

杉並「くくくく」

ちなみにこいつらは3人でよくつるむため通称で悪ガキトリオだ
義之「……つて言われてもなあ。いろいろ文化祭でやった感があるしなあ」

それはなぜかと言つと

杉並「ふむ。我が校はイベント好きだからな。まあ、それでこそ俺も張り合いがあるとつものだが」

そうこの学校、風見学園はイベントが盛りだくさんなのだ、普通の学校に比べて2倍近いのではなからうか？

と気付いたら杉並が懐から黒皮製の手帳を取り出していた

義之「なんだそれ」

杉並「ネタ帳だ」

義之「お笑い芸人か、お前は
確かに」

渉「俺も手帳、持つてるぜ」

と渉が制服のポケットから手帳を出したが……

義之「ふーん……つて、なんで表紙にプリントシールばっか貼っ

てんだよ、女子かお前は！」

所謂プリクラ帳か

涉「可愛いだろ」

いや、むしろ

義之「きもい」

うむ

涉「うわ、きもいはちょっとひどくない？ お前はもっと俺に優しくするべきだ！！」

いやお前の扱いはそれで十分だ

義之「お前こそ、もっと環境に優しくなれ」

うむ

涉「か、環境だあ？ お、俺は環境を汚染してるのかよ……」
まあお前だけが原因ではないが

杉並「環境だけではない。今や板橋は地球規模で汚染存在だ」

言い切ったよおい

涉「うわあああ、許してくれ、地球っ！ ってか俺ってすごくない？」

アホのな

麻耶「ちよつと、そこの悪の根源3人組！」

確かに

沢井は義之たちをズビシッと指で指していた

麻耶「ちゃんと会議に参加しないと、あんたたちに決めてもらうからぬ」

まあここまで遅れた理由の大半が義之たちが原因だしな

義之「悪の根源3人組って、俺も入ってるの？」

なにを今更

麻耶「当たり前でしょう。ふたりがボケで、あんたがツッコミ」

まあ妥当だ

義之「いつの間にそんな役割が……。心外だ」

最初からだよ

杉並「では、いっそのこと3人ともボケということはどうだ？」

は？

涉「そうだな。新しい世界が拓けるかもな」

おいおい、それじゃあ

義之「收拾つかんだろーが」

その通りだ

と気付いたら静まっていた教室が騒がしい

どうやら義之たちの漫才で沸騰したようだ

沢井が今にも3人をぶちのめさんとばかりに睨んでいる

麻耶「静かに！！」

と沢井が手を叩いた

麻耶「今、決まらないなら、放課後決まるまで残ってもらおうけど」

それは困る

どうやら全員同じ思いだったのか一気に静まった

義之「でも、なにをしたらいいのか、ぜんっぜん思いつかーん」

と義之が即効で断念した

まあ確かに俺もない

？「人形劇」

と静かな教室に抑揚のない声が聞こえた

声のほうを見るとそこに居たのは

見た目が人形みたいなお柄な女子の雪村杏ゆきむらあんずだった

因みに席は義之の左隣で窓に接している

こいつは人形みたいに小柄で可愛いんだが表情が乏しいので思考が分からないし、何より、時折吐き出す毒舌が凄まじいのだ、しかしなんでも雪村流絶対暗記術とかを身につけているとかでとにかく頭は良い

杏「人形劇はどうかしら？」

とまた言った

教室内から「なるほど」やら「それもありが」と聞こえてきた

杏「せっかくクリスマスなんだし、ファンタジーっぽい出し物なら文句、ないでしょ？」

ふむ

麻耶「なるほど」

と教卓に居た沢井が頷いた

すると義之の前の女子が手を挙げた、その人物は杏と仲の良い花咲はなさき

あかね
茜だ

茜「はい。私も人形劇がいいと思いまーす、クリスマスだし。

こう、ロマンチックな物語とかがいいんじゃないかなあ？ 聖なる

夜を盛り上げるラブロマンスとかー」

と爆乳で豊満なボディをくねらせながら言っている、恐らく男子の票をお得意の色香で誘ってるんだろ

まあ確かに季節柄ロマンスものには一理あるが

と色香に誘われた男子が次々に手を挙げた

渉「俺も賛成だー」

お前もか、ブルー ス

義之は落胆している

まあそれも仕方ないな杏と茜が結託して意見を出すときは何かしら企てている場合が多い

まあそれは杉並、義之、渉も一緒だが、……いや義之は巻き込まれてるだけか？

そして女子2人と義之たちは仲がいいのだ

む？ バランスが悪いつて？ 安心しろ女子にはもう1人居るから

杏「ついでに提案なんだけど……人形劇のヒロイン役は、小恋ここ・
……なんてどうかしら」

杏が1人の女子の名前を出したとたん椅子が派手にこけた音が教室に響いた

クラスメイト全員の視線が音源に向けられた

小恋「あい……たたた」

と椅子ごとこけた小柄だが胸が大きいちょこんと出たアホ毛が特徴の女子が椅子を直しつつ、ぶつけたんだらうお尻をさすりながら立ち上がった

小恋「え、な、なに言い出すの、急に」

今椅子に座ったのが月島小恋つきしまここと言い、仲よし組みの最後の1人だ
因みに3人の名前の頭文字をそれぞれ取って通称、雪月花せつげつかと呼ばれ
ている仲よしメンバーだ

補足だが義之とは小学校からの付き合いで、所謂幼馴染だ、俺達全
員で仲よし12人組み（俺とフェイトとアリシアとなのはとユーノ
及びはやて含めて）ってわけだ（時々俺が居ていいのかもと思うが）
気付くと義之がうな垂れている

小恋「あの、あの、あの」

小恋は顔を赤くしながら戸惑っている

まあ雪月花の中では1番まともなんよねこいつ

性格よし、顔もよしでクラス内ではくクラス内1番の良心と言わ
れるほど人気があり、まあヒロイン役に抜擢されても誰も反論しな
いだろう・・・本人以外は

小恋「そんなのできないよ」
な？

杏「大丈夫」

茜「うんうん。小恋ちゃんならできるって」

小恋「な、何を根拠にそんな」

麻耶「ラブロマンスにするなら、相手が必要ね」

・・・なるほどね2人の企みが分かったよ

杏がフフと笑いながら

杏「・・・相手役は義之で決まりでしょ」

茜「賛成です。相手役は義之くんがいーと思いまーす！」

やっぱり

義之「はえ？」

なにアホな声を出してるんだよ

クラスメイトの視線が義之に集中した

涉「うお、マジかよ。俺じゃねーの？」

いやお前は論外

茜「だめだよお。義之くんっていい声してるし、演技もうまいんだから」

義之「俺がいつ演技をしたんだ？」

それはお前あれだろ

杏「仮病で学校を休んだ時」

義之「ぐっ」

そうなのだ、義之の奴ゲームをやりたいからって仮病で学校を休んだ方がいいが、電話越しにやった熱にうなされた声があまりにも迫真の演技だったために先生が救急車を手配してしまったのだ、おかげで義之は救急車に乗せられて病院に運ばれて先生が来る直前に脱走、結果、仮病とバレて大目玉を受けた

義之「いやー、あのときはさすがに焦った。危ない、危ない」

麻耶「照れながら言ってる場合じゃないでしょ！」
「まったくだ

茜」と、いうわけで、どうかなあ？ 小恋ちゃんの相手役は義之くんってことで」

杏「特に問題はないと思うけど・・・」

小恋「ちょ、ちょっと待って！ そんなの無理、無理！ 義之がそんなのするわけないよ。あの義之だよ？」

お前さん本人の前で言うか

まあ実際義之がこういった催し物にまじめに取り組んだ覚えは無いからな、確かに頷けるが

因みに小恋は赤い顔を更に紅潮させつつ、義之を上目遣いに見ている

麻耶「ふむ。そうね・・・悪の根源の1人を催し物の重要な役割にすれば、悪さも半減するか」

義之「え〜。俺ってすごいマジメで、すごいいい人なのに。公園のゴミとか拾うのに」

説得力0だ

麻耶「黙りなさい、このさわやかヤクザ」

新しい！？

義之「さ、さわやかヤクザって何？」

確かに

涉「さわやかな笑顔を浮かべつつ、相手をボコ殴りにする人」
なるほど？

義之「そ、そんなイメージなの？ 俺って・・・」

ドンマイ

杉並「・・・お化け屋敷か」

義之「は？」

杉並が今までの発言を完璧に無視して言った

杉並「ふむ、お化け屋敷。なるほど、催し物をお化け屋敷にすれば・・・、ここをこうしてと、そうだなアレは科学部の連中から拝借するとして・・・うん、これならばあの計画も・・・」

杉並が黒皮の手帳を見ながら何かつぶつと呟いている

義之「お、おいおい・・・今の話聞いてたか？」

義之がなにか勝手に決め込んでいる杉並に聞いた

杉並「聞いていた。月島とお前が人形劇を通じて、不毛な疑似恋愛をするという話だろうか？」

義之「なんだか身もふたもない言い方だな。っていうかクリスマスにお化け屋敷？」

まあ確かにあれはむしろ夏では？

杉並「季節など関係ない。真冬でも桜が満開のこの島で何を躊躇うためらことがあるだろう、要は気になるあの子を誘って、暗闇で告白できる！ 2人の密着度、MAX！ そんなスーバラシーお化け屋敷を作ることに何の異論があると言うのだ！」

と杉並の口上に男子の野太い歓声が挙がった。

その中には涉まで居た・・・どっちだよ

しかし杉並が色恋沙汰に手を貸すような言動をとるか？

こいつは色恋沙汰よりもUMAとか埋蔵金とかUF^{ユーマ}Oとかのオカルト方面にしか反応しないはず、一体何を？

義之「何を企んでやる」

義之が俺の気持ちを代弁してくれた

杉並「やだ、なんのこと？」

義之「なんだ、てめえ。その汚れを知らない天使のようなおとぼけ顔はー！」

胡散臭すぎる

麻耶「はいはい、静かにー！ 杉並。その意見を出したっていうことは、あんたが責任者になってくれる。そう解釈しても構わないのね？」

沢井が騒いでいる男子を黙らせて杉並に聞いた

杉並「ふふふ。ホラーハウスのオーナーとでも呼んでくれたまえ」

麻耶「あ、そう」

沢井は杉並の言葉を受け流した

麻耶「どのみち生徒会から目をつけられるだろうけど、でも、もう時間もないし、人形劇をやるにして、物語とか、具体的なイメージはあるの？」

沢井はずり落ちた眼鏡を直しながら杏たちに聞いた

茜「ロマンチックに、夢見るように」

麻耶「抽象的ね・・・」

杏「既にシナリオ構成は出来てるわ」

そっぴや杏は演劇部だったな

麻耶「なるほど。では、今2つの意見が出たわけだけど、他にはない？」

クラスの皆は人形劇かお化け屋敷で盛り上がっていた

人形劇がほとんど女子で、お化け屋敷がほとんど男子だ

因みに人形劇の場合ヒロインと主役は小恋と義之で既に決まっている、それと小恋は音楽が得意だから（軽音楽部所属）ついでに音楽決め役にも決まったようだ

因みに小恋は困った表情をしながらお化け屋敷と言っている（チラチラと義之を見ながら）

茜「ね。義之くんはどっちがいいの？」

茜が義之の顔を覗きながら聞いている

義之「どつちでもいいけど、人形劇だったら、ちよつと大変かな」

杏「大丈夫よ。義之のセリフ、少なくするから」

義之「ホントかよ」

杏「覚える気ないだろうし・・・」

ごもつとも

義之「そ、そんなことないけどさ」

説得力0だ

杏「時間もあまりないから」

杉並「いやいやいや。すまないお嬢さん方。桜内の心は既にお化け屋敷で固まっている」

と杉並が義之の肩に手を回しながら言った

涉「俺もお化け屋敷で賛成だな」

茜「涉くん、さつき人形劇に賛成だったじゃない」

確かに

涉「えー。だって暗闇でドッキリだぜー？ なあ月島」

小恋「え？ あ、そ、そうだよ。うんうん」

と、いきなり話を振られた小恋は焦りながら答えている

涉「ほらー。月島だって、ああ言ってるじゃん」

茜「小恋ちゃんまで」

小恋「だ、だって、わたし、ヒロインなんて出来ないもん」

小恋の自信なさげな言葉に杏と茜、顔見合わせたよ

涉「暗闇でドッキリ・・・ああ。なんて魅惑的な言葉なんだ！ 俺、

絶対ドッキリしたい！ ドッキリついでに、あんなことか、こん

なことか！ だあああ、もう心臓バクバクー！」

義之「落ち着け、ドッキリしすぎだ」

義之が暴走し始めた涉を嗜めている

麻耶「んもう！ 静かにしなさいーい！！ まったく何度言わせ

たら気が済むの！？」

沢井が教卓を叩きながら叫んだ

杏「委員長、落ち着いた方がいいわ……。あなたがこの議題で『静かにしなさい』って言ったのは、11月から数えて41回よ」
よく覚えてるね

麻耶「誰も数なんて聞いてないでしょ！」

杏「ちなみに、教卓を叩いたのは11月から28回……。深呼吸が必要だと思っわ」

麻耶「く、くだらないこと覚えてないで、静かにしてよね……」

で結果多数決にもつれ込んだが、このクラスの人数は奇数だ
で現在半々に分かれた、最後の1人は義之だ、さてどっちを選ぶかな？

麻耶「桜内……」

義之「え、え？」

沢井が呆けていた義之に聞いた

麻耶「早く決めてくれない？ あんたで最後なんだけど」

義之「はれ？」

お前気付いてなかったな

杉並「ふっ、わかつているな同志よ」

義之「う」

杏「……」

義之「え、えと」

困ってるな

さてどうする？親友よ

選択 前編（後書き）

裕也「なんか面白そうな予感」
フェイト「え？」

選択 後編（前書き）

裕也「どうなるかな？」

選択 後編

裕也 side

義之「それ以外がいいなあ……」
なんですと？

義之はしばらく黙考した挙句そう言ったのだ

麻耶「はあ？」

沢井が怪訝そうな眼で義之を睨んだ

義之「どうせだったら、もっと違うやつにしないか？」

義之お前……

麻耶「あのねえ、桜内……、今更なに言ってるわけ？ 多数決

なのよ。あと1票で決まるのに、まぜっかえさないでよね！」

裕也「沢井よ落ち着け」

俺は義之の言葉で案の定で怒った沢井をなだめた

杏「何か具体的な案があるわけ？」

雪村流暗記術で先ほど義之が言った「何も思いつかない」宣言を忘れていない杏が義之にたずねた

義之「ん〜。具体的なものがあるわけじゃないけどさ、せつかくのクリパなんだし、もっと盛り上がるものはないのかな〜と思って」

裕也「なるほどね、要するに刺激が足りないわけか……」

義之「その通り」

確かに今出ている2つは何処のクラスでもやっていて新しさはないからな

杏「まあ、ある意味具体的ね」

麻耶「具体的なのは方向性だけでしょ？ 何をするかは全然具体的じゃないじゃない」

茜「まあ、ある意味義之くんらしいよね」

小恋「うん……」

はやて「そっやね」

裕也「ああ」

フェイト「だね」

俺たちは慣れているから義之を見た

麻耶「杉並、あんたからも何か言っただんなさいよ。あんたたちの案じゃ、不満なんだってよ?」

杉並「ふふん……。面白そうなので、しばらく傍観させてもらう」

麻耶「はあ?」

沢井が信じられないと杉並を見ている

杏「こういうとき、義之にまかせておくと、話がとんでもない方向へ流れることがあるもんね……」

杉並「そういうことだ。今年の体育祭然り、文化祭然り……。裕也「ああ、こういうときの義之は面白いことをやってくれるからな」

フェイト「はあ、裕也が乗っちゃった」

はやて「まあまあ、フェイトちゃん」

アリシア「そうだよフェイト楽しまなくちゃ」

そう言ったのはフェイトの前の席に座っている(俺の右斜め前)アリシア・T・ハラオウン、フェイトの双子のお姉さんだ、フェイトとは見た目がほとんど一緒だが唯一違うのは眼の色くらいで、フェイトは赤に対してアリシアは水色だ

麻耶「とんでもない方向に流れてもらっちゃ困るのよ、春の卒業パーティーのときみたいになっただらどうするの?」

と沢井が困りながら俺達に向けて言った

義之「杏、卒パでの出し物覚えてるか?」

えーと確か卒業パーティーでの杏と茜のクラスでの出し物は……(去年はクラスが別だった)

杏「セクシーパジャマパーティーのこと? 当然よ。ね、茜」

茜「うん」

思い出した、こいつら寝巻き、要するにパジャマ姿で接客をしたの

だった

義之「そういう感じのはっちゃけ具合が欲しいんだよ」

裕也「なるほどね」

杏「もう一回やってもいいけど？」

杏が小悪魔的な笑みを浮かべながら言った瞬間

涉「マジですか!？」

涉が飛びついてきた

義之「ん〜、それはちよつと……」

涉「なんだよ! 今年のクラスでやれば、杏や茜だけじゃなくて、

月島のパジャマも見れんだろおが」

涉が自分の欲望^{エロス}に忠実に叫ぶと

麻耶「板橋……」

沢井が涉をギロリと睨んだ

涉「あ、あといいんちよのパジャマ姿も……」

涉よそう取ってつけたように言ったら傷つくだけだが

麻耶「……はあ」

裕也「まあ、なんだお疲れ……」

俺は気休めかもしれんが労わりの言葉を送った

杏「義之は、セクシーパジャマパーティーじゃ不満なの?」

義之「別に不服ってわけじゃないけど、それじゃ、卒パの二番煎じ

になっちまうだろ?」

杏「いいものは何回やっても、いいものよ」

義之「そうかも知れないけど、インパクトをもうちよつとねえ……

」

茜「インパクトねえ……」

なのは「インパクト……」

ユ一ノ「インパクトか……」

気付いたら俺たちはクラスで一丸となって考えていた

小恋「あ、あれは?」

義之「何?」

俺達は小恋を見た

小恋「わたしたちのクラスでは、焼きおにぎり屋さんだったじゃない、あれならインパクト、あるんじゃない？」

義之「焼きおにぎりか……」

焼きおにぎり屋とは去年杏と茜と渉以外の居た俺達のクラスでやった出し物だ（途中からある理由で被害が続出したが）

これは『美少女が生の手で握ったおにぎり』を焼くという宣伝でやったのだ、しかも杉並の巧妙な情報操作により爆発的な勢いで売れたのだ

閑話休題

茜「つまり、パジャマパーティーで焼きおにぎりを作るってこと？」

麻耶「なんか二番煎じっぽいわね」

確かに

義之「でも、方向性としては悪くないと思うんだよ。どう思う？」

杉並「

杉並「ふ、握って作られるのは、何も焼きおにぎりだけではあるまい……。なあ、委員長？」

む？ なぜに沢井に振ったんだ？

麻耶「え？ あ……」

沢井がなぜか表情を変えた。

どうやら、何か思いついたようだ

義之「思いついたか？」

クラス中の視線が沢井に集まった

麻耶「え？ あ、いや……ダメよ。そんなの……」

む？ 沢井にしては珍しく口ごもったな

渉「おいおい、発言する前から自分で否定してんじゃないぞ。ダメ

かどうか、言ってみなきゃわかんね〜だろうが！」

裕也「渉にしては良い事言った」

渉「ヒドい！」

麻耶「え、え〜と・・・」

なぜか沢井は恥ずかしそうにしている

麻耶「・・・」

しばらく言おうとしたりしなかったりを繰り返して沢井は視線を逸らしながら小声で呟いた

渉「聞こえね〜ぞ〜」

渉がもう1回催促したら

麻耶「お、お寿司って言ったのよ！」

裕也「なるほど、寿司か・・・」

義之と杉並が視線を合わせた

杉並「光明が見えたな」

裕也「ああ、それだ！」

俺達は頷きあった

義之「行けるんじゃないか？ 寿司屋なんて他所のクラスじゃ絶対

思いつかないぞ！」

クラスが一気に活気付いた瞬間だった

渉「セクシーパジャマパーティー、フィーチャリング寿司屋か。面

白そうだな、ん？ いやセクシーパジャマ寿司バーがいいかな・・・

」

そんなもんでもいいわ！！

クラス中から「それだ！！」とか「面白そう！！」などなど聞こえてきた

杉並「ふっふっふ、タイトルはこれで決まりだ。『セクシー寿司パ

ーティー』、コトネーム暗号名はSSP！！」

名前のインパクトと意味のわからなさ具合がいい感じに合致した

SSPか・・・。こりゃ、今年のクリパは寿司の旋風が巻き起こりそうだな

杏「ほらね、義之にまかせると、面白い方向に転がるでしょ？」

茜「うんうん。ホントだね」

はやて「さすがは義之くんや！」

なのは「にやははは」

小恋「でも、いいのかなあ。こんなので……」

麻耶「ちよ、ちよっとちよっと、皆、何決まったような顔してるの？　そういう案が出たってだけの話でしょ？」

沢井が俺達を現実に取り戻そうとしているが

杉並「何を言うか、委員長。俺の中ではすでに決まったも同然だぞ」

麻耶「お化け屋敷はいいの？」

杉並「ふふん。企画は次回に持ち越したな……」

はい、まずは逃げ道が半分無くなって

麻耶「に、人形劇は？」

一縷の希望に望むが

杏「シナリオの構想から練り直すわ……」

麻耶「……」

はい、囲まれた！

クラスの雰囲気はSSP一色に染まる中、沢井だけが渋っていた

杉並「何をためらう必要があるのだ、委員長。寿司が食い放題なのだぞ」

麻耶「お、お寿司……」

そういえば沢井は寿司が好物だったな

これは決まったな。

義之の一言から始まって、ちよっとした考えから思わぬ方向に進んだみたいだが

皆乗り気になったのでこれで決まったな

そして俺達の出し物が暗号名^{コードネーム}SSPこと『セクシー寿司パーティー』
に決まったのだった

選択 後編（後書き）

裕也「さすがは義之だ、期待を裏切らないな！」
フェイト「いいのかな、非常要員とはいえ生徒会役員なのに、しかも書類まで偽造して……」

新しい出会い（前書き）

裕也「さてとようやく昼飯か」
フェイト「裕也、ご飯食べよう？」

新しい出会い

義之 side

む、ようやく俺か・・・

俺は昼休みのチャイムと同時に背筋を伸ばした

義之「くあ〜」

と俺があくびをしたら

杉並「どうだ桜内。一緒にメシでも」

振り返ると、杉並がイヤラシイ笑みを浮かべて立っていた

義之「俺は別に構わんけど、渉はどうするよ？」

俺は机に突っ伏している渉に声をかけた

渉「あー、俺はパスパス。2人で蜜月の時間を楽しんできてくれ」

と渉は手をひらひらさせた、つてか嫌な言い方すんな

杉並「ふむ、それではふたりきりの甘いランチへしけこむとするか」

義之「気持ち悪いこと言うな」

一瞬鳥肌がたったじゃねーか

杏「なるほど、このカップリングはありかもね」

茜「だよね〜。なんか色々といけない想像が・・・。ねえ、小恋ち

ゃん？」

小恋「ふえ！ な、なんでわたしに聞くの!？」

茜「だって小恋ちゃん、そういうの好きじゃない」

小恋「そんなことないよ〜」

杏「自分の欲求に素直になる。それが1番よ、小恋」

小恋「だ、だから、違うってば〜」

後ろのほうで勝手にキャツキャと盛り上がってる雪月花3人組

アホか

義之「で、どこ行くよ？ 学食か？ 購買か？」

俺は杉並に聞いたのだした

杉並「ふふふ・・・。まあ、黙ってついて来い。とっておきの場所

に招待しよう」

にやりと笑って、すたすたと教室を出た杉並

義之「しゃーなーな」

俺は杉並を追った

義之「で、どこまで行くんだよ？」

俺は上履きから靴に履き替えながら聞いた

杉並「なあに、ちよつとそこまでだ」

そう言った杉並の後を着いて行き

校門を出ていった

義之 side END

裕也 side

俺はフェイトと一緒に弁当を食べていた

裕也「ふむ、相変わらずリンデイさんは料理上手だな」

俺はリンデイさんが作った弁当を素直に賞賛していた

フェイト「(ボソリ)うーん、今度は私が作ってみようかな？」

裕也「なんか言ったか？」

フェイト「う、ううん！ 別に！！」

裕也「そ、そうか」

俺はフェイトの珍しく強い語気に少し驚いた

裕也「しかし、義之と杉並は一体どこに行ったんだか」

義之たちは昼休みが始まると同時に教室を去ったきりだ

とその時、ポケットの携帯が震えた

裕也「む？ 一体だれだ？」

俺は携帯を開いて画面を見た

裕也「水越先生？」

水越先生とは、本名を水越舞佳みずこしまいかと言い、保健室の先生だが、本業は

天枷研究所の研究員なのだ

裕也「(ピ!) はい、防人です」

水越「あ、裕也君? 今いい?」

裕也「はい、丁度弁当も食べ終わりましたし」

俺は携帯を肩で抑えながら、弁当を片付けていた

水越「よかった、ちよつと手伝ってほしいことがあるんだけど、いい?」

俺は時計を見た、ふむ、まだ時間的にも余裕があるな

裕也「はい、構いませんよ?」

水越「よかった、じゃあさ今から校門のところに来てくれる?」

裕也「分かりました、少し待ってください」

そう言つて俺は携帯を切つた

フェイト「水越先生なんだった?」

フェイトが俺に聞いてきた

裕也「なんでも手伝ってほしいことがあるんだとよ、ちよつと行つてくる」

フェイト「うん、行つてらっしゃい」

俺は教室を出て校門に向かつた

そして校門に着くと

水越「よし来たわね?」

そこにはタバコ(無着火)をくわえた白衣を纏つた女性が居た、この女性が水越舞佳先生だ

裕也「どうしたんですか?」

俺は呼び出した用件を聞いた

水越「ん? ちよつと立ち入り禁止の場所に誰かが入つたみたいでね、戦力が欲しいのよ」

裕也「なるほど、了解」

俺は了承した

水越「それじゃ着いてきて?」

俺は水越先生に着いて行つた

桜公園を抜けて道なき道を歩き密林を越えたら俺の目の前に洞窟が見えた

裕也「ここは・・・」

水越「ここは”ある存在”を封印していたの、うーん、バリケードあつた筈なんだけどな」

そう言いながら水越先生は洞窟内に入ってしまった

裕也 s i d e E N D

義之 s i d e

俺達の目の前には女の子が眠っているカプセルがあり、そして先ほど俺の膝がそのカプセルの横にあつたスイッチを押してしまった。

すると洞窟内にピコンピコンと電子音が鳴り響いた

義之「どうするよ？」

杉並「ふむ。まあ、押してしまったものはしょうがない。なるようになるだろ」

義之「ずいぶん軽いな」

杉並「深刻になったところでどうしようもあるまい」

確かにね

義之「なんだと思う？ これ」

俺は指差しながら聞いた

杉並「さあな。まあ考えられるとすればー」

とその時電子音が止まった

義之「考えられるとすれば？」

杉並「こういうことだな」

俺は杉並の視線を追ってカプセル内の少女を見た

そして、ガツチリと視線が交錯した

義之「なるほどね」

予想通りの結末。

少女は俺を睨みつけていた。

そして何故か拳がプルプルと震えている

そして体を起こした。

しかも勢いよく

ゴーン！！

？「あがつ！！」

義之「……」

まあ、そうなるわな

杉並「……」

いい音が鳴り響いた。

おかげで神秘性が一瞬で吹っ飛んだよ

ガラスの蓋がビリビリと震えている

？「き、貴様っ！ 謀ったな！！」

いや、なにも謀ってないです

義之「……てか俺のせいかな？」

杉並「ふむ、難しいところだな」

いや、どうみても俺のせいじゃないと思うんだけど。

と少女が中になにかしらの操作をすると。

ウィーンとモーター音がしながら蓋が開いた

？「ちっ！」

少女は上半身を起こすと同時に盛大に舌打ちした
おでこが赤く染まっている

義之「あの、大丈夫」

？「貴様か？」

義之「な、なに？」

？「貴様が美夏を起動したのかと聞いている」

杉並「起動だと！？　と言うことはもしやっ！」

杉並が驚きつつどうやらこの子の正体に気付いたようだ

？「部外者は黙っているっ！」

杉並を少女は鋭く一喝した

杉並「む、むう」

？「なぜ美夏を起動した？　なにが目的だ？」

感情を抑え込んだ低い声。

明確に敵意を持った視線。

ぴんと空気が張り詰めていく。

いや〜偶然です〜。

たまたま興味本位で洞窟に入り、屈んだ拍子に膝がぶつかって起動
しちゃいました〜。

そんなことを言ったら間違はなく殺されちゃいそうな雰囲気だ。

ここは慎重に言葉を選ばないとー

杉並「ふっ、ただの偶然だ。屈んだ拍子にこいつの膝が起動スイッ
チを押したただけだ」

義之「バカかお前はっ！」

思わず叫んだ、って、声裏返ってるし

義之「なにをバカ正直にー」

？「・・・そうか。膝が・・・ね？」

俺もバカか！

後悔しても後の祭りだった

少女はゆっくりと身体を起こして、カプセルから降り立った。

？「・・・偶然に・・・だと？」

少女は伸びをしながら、首をこきこきと鳴らした。そして身体を半身に構え、ぐっと拳を握り締めた。

？「・・・ふざけたことを」

ヤバイ！

義之「ちよ、ちよつと待ったあ！ 落ち着いて話そう、な？ な？」

？「人間風情と同じ時間を共有しなければならぬと考えるだけで・

・・・虫唾が走る」

義之「そ、その、勝手に起動したことは謝るよ、ごめん。でも暴力ではなにも解決しないと思うぞ、ほら、杉並もそう思うだろ？」

俺は一縷の希望に縋る思い（不本意だが）で杉並に声をかけた

杉並「すまない。部外者は黙っていないと怒られてしまうもんで、その件に関してはノーコメントとさせてくれ」

こ、この野郎！！

？「覚えておけ。美夏はこの世界で嫌いなものが2つだけある、1つはバナナ。そして、もう1つは・・・人間だ！」

ぐいぐいとにじり寄ってくる少女。

？「美夏はずつと眠っていたかったのだ。それを無理やりたたき起こした拳句、偶然だと？ それで済まされると思っているのか。これだから人間ってやつはっ！」

少女は大きく右拳を振り上げる。

いや、だから暴力はいけないでえ！

？「食らえっ！」

風を切る音。

眼前に拳が迫った瞬間だった

ダン！

と音が聞こえて、拳が止められた後少女は押し倒されて、その首筋に刃が当てられた

？「そこまでよ！」

鋭い声が響き渡った

？「な、なに！？」

？「俺の親友に手え出そうとは、いい度胸だな？ 死ぬか？」

？「どうやら間に合ったようね」

どこのどなたか知りませんが、ありがとうございます！

？「H M I A 0 6 型、ミナツね？」

俺は抑えてくれた人物と声の人物を見て驚いた

義之「裕也に水越先生！？」

それは保健室の水越舞佳先生と親友の裕也だった

水越先生の背後からは数人の屈強そうな男性達が俺達を包囲した

水越「あゝあ、あんたたちだったのね。こんなオイタしたのは。ま
つたく〜」

水越先生は呆れたようにため息を吐いた

義之「す、すいません」

水越「ま、いいわ。裕也君そろそろ解放してくれる？」

裕也「・・・了解」

裕也は、押し倒していた少女の首筋から日本刀を離してから、少女
を解放した

水越「で、お目覚めはどうか？ ミナツさん」

水越先生は身体を起こした少女に聞いた

？「聞くまでもないだろう。最悪だ！」

水越「ごめんなさいね。私達としてもあなたを起こすつもりはな
かったの。でも、起きてしまったからには・・・」

水越先生が周囲に目配せすると包囲していた男性達が包囲を狭めて、
裕也が刀を構えた

？「誰も逃げたりなんかしない」

水越「そう。素直で助かるわ、それじゃあ、連れて行って」

男「了解しました」

そして、少女を取り囲むように連れて行く

な、なんなんだこの状況は

洞穴の中に変なカプセルがあつて、そこで女の子が眠っていて、ア

チームが鳴ったと思ったたら裕也と水越先生がやってきて……。
H M I A 0 6 型？ ミナツ？

頭が混乱してる

お、落ち着け。

とりあえず情報の整理をー

？「貴様たち、なんという名前だ？」

義之「へ？」

裕也「……なに？」

突然、話しかけられて思考が飛んだ

？「バカか貴様は。美夏は貴様達の名前を聞いているのだ」

義之「え、あ、あつと、桜内義之」

裕也「防人、防人裕也だ」

？「桜内に防人か、その名前、覚えておくからな」

ぎろりとひと睨みされる。

いや、覚えなくていいから

裕也「やれやれ」

そう言いながら裕也は刀を鞘に仕舞って、空間魔法で消した

そのまま少女は男達に連れて行かれた

水越「まったく、入り口の立て看板が見えなかった？ 立ち入り

禁止って、それに有刺鉄線を嚴重に張り巡らせといたはずだけど？」

杉並「いえ、俺達が来た時には有刺鉄線は切り取られていました。」

立て看板には気がつきませんでした」

杉並がしれつと嘘を吐いた、裕也も気付いてるようで杉並を睨んで

いた

杉並「それよりもさっきの娘は？ H M I A 0 6 型とか言っていた

ように聞こえましたが」

水越「はあ、しょうがないわね、彼女はロボットよ。H M I A 0

6 型、開発コードはミナツ」

義之「ロボット!？」

俺は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。そのくらい驚きだった

裕也「なるほど、あの手ごたえはやはりそうだったか」

お前は気付いてたんか！？」

杉並「・・・ミナツ？」

水越「ええ、そうよ」

義之「いや、だってあんな感情豊かなロボットなんて」

確かに、最近のロボット技術はかなりの水準に達していると言っている。いい。

現在市販されている『μ《ミュー》』というロボットを見たことがあるが、パツと見は確かに人間そっくりに見える。

しかし、あそこまで感情豊かに動いたりしゃべったりするロボットを、俺は知らなかった

杉並「うむ。確かにあそこまで見事に人間らしさを持ったロボットは見たことがないな」

裕也「ああ」

水越「あの子は特別な。だからここで眠らせていたんだけどね、まったく、余計な仕事を増やしてくれて」

義之「すみません」

水越「そうね、悪いと思ってるんならひとつ仕事を手伝ってもらおうかな？ 桜内義之くん」

義之「は、はい。俺にできることなら」

水越「うん。それじゃあ、後で放送で呼び出すからよろしくね、ということで、とっとと帰りなさい。授業はじまっちゃうわよ」

水越先生はこれでお終いとばかりにパンパンと手を叩いた

義之「はい、失礼します」

俺は水越先生に一礼して、歩き出す

水越「あ、そうそう、さっきの出来事は全部忘れなさい」
背中にかげられる声

静かに、鋭く。

水越「これはお願いじゃないから。この意味、わかるでしょ？」
杉並「もちろんです」

水越「うん、それならいいわ」

そして洞窟を出た

義之「結局なんだったんだよ？」

杉並「簡単なことだ、洞穴の中に最新鋭のロボが保管されていた。

それをお前が起動してしまった」

義之「水越先生は？ どうしてここへ？」

杉並「さしずめ本職は研究所の職員ってことだろう。副職として教師をする。さして珍しいことでもない」

ま、そんなところだとは思うけどさ。

裕也「杉並正解な？」

やっぱり

杉並「それにしてもすばらしい体験だった。あそこまで生々しいロボを目の当たりに出来るとは」

思い出したように興奮気味に話す杉並

義之「確かにな、さてと、って、あーっ！」

杉並「どうした？」

裕也「なにがあった？」

義之「時間だよ時間。授業開始まで後5分しかないじゃねーかよ！」

杉並「ああ。と言うことで少し走るぞ」

義之「ばか！ メシは!？」

杉並「あきらめるんだな。その分貴重な体験が出来たんだ。結果的にプラスだろ。」

裕也「それはお前だけだ」

義之「ふざけんな！ 俺のメシを返せ！」

杉並「別に俺が奪ったわけじゃないから、返したくても返せんな」

義之「くそ！ カロリーが足りてないんだよ！」

俺たちは少ないカロリー（裕也は別）を気にしながら学校まで走っ

たのだった

新しい出会い（後書き）

裕也「疲れた・・・」
フェイト「大丈夫？」

天枷美夏のデバイスの決定（前書き）

裕也「よかったな、決まって」
作者「うむ、確かに」

天枷美夏のデバイスの決定

此度は私、京勇樹^{けいゆうき}の作品を読んでいただき誠にありがとうございます。

以前募集した天枷美夏とエリカ・ムラサキのデバイスのうち、天枷美夏のデバイスの能力と名前が決定いたしましたので、お知らせいたします。

決定いたしましたのは、碧^{みどり}さんがご応募してくださいました、デバイス名コロス（ギリシャ演劇のバックコーラスより）を採用いたしました。

詳細な設定とバリアジャケットの形状は後日設定に追加させていただきます。

尚まだエリカ・ムラサキのデバイスは決まっておりますのでドシドシご応募お待ちしております。

それと、ご応募いただきました設定などは多少変更する場合もありますことをご了承くださいますようお願いいたします。

ここまでお付き合いいただき誠にありがとうございます、引き続き私、京勇樹の作品「D・C?」なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士」をお楽しみください。

天枷美夏のデバイスの決定（後書き）

美夏「応募ありがとうな！ 美夏も嬉しいぞ！！」

ヘッドハンティング(前書き)

義之「おとどろっすかな」

ヘッドハンティング

義之 side

義之「さてと、今日はどうすっかな」

ホームルームの終わり、放課後の校内。

今後の予定を考えながら、俺は廊下を歩いていたと、その時だった

まゆき「よっしゃ、弟くん発見」

と、聞きなれた、でもあまり嬉しくない声を後ろからかけられた。

まゆき「弟くん、今、暇？ ってか、もちろん暇よね」

ぐるりと回りこんで、俺の目の前に立つまゆき先輩。

義之「え、えつと・・・」

さっきは先輩から後光がさしているように見えたのに（何があったて？ 聞くな）、今は悪魔の尻尾が見える気がする

まゆき「ん？ なになに？ あまり会いたくない人に会ってしまったて、どうやってこの場から逃げ出そうか考えてる顔をして」

うぐっ！ 鋭いっ！

まゆき「ま、弟くんがそんなことを考えてるわけないけどね。ね、弟くん、このまゆき先輩に偶然会えて嬉しいでしょ？」

ぐいっとな身を乗り出して、睨んでくる。

義之「そ、それは、もう・・・」

結局、そう答えるしかないわけで。

嫌いではないんだけど、苦手なんだよな、まゆき先輩って。

どうやって、勝ち目無いって言うか、オモチャにされるって言うか。

俺の回答に満足したのか、まゆき先輩はふふんと笑みを浮かべる。

まゆき「んじゃさ、ちょっと付き合ってよ」

義之「付き合っつて、どこへ？」

まゆき「ちよっと、そこまで」

そう言つて、まゆき先輩は俺の手を掴んだ。

義之「そんなんしなくても、別に逃げないですよ」

まゆき「そう言つて、昔、何回も逃げたのは誰だつたかしら？」

ジロリとまゆき先輩に睨まれる。

義之「あ、あはは・・・」

まゆき「ほら、とつとと行くよ、あたしもあまり時間無いから」

そう言つて、俺はまゆき先輩に拉致（人聞き悪い事言つな！）同様に連行されたのは、生徒会室だつた。

フェイト「あれ？ 義之？」

そこに居たのはフェイトだけだつた、コの字に並べられた机の1つのイスに座つて書類（かな？）の処理をやつてるらしい。

まゆき「フェイトだけ？ 裕也は？」

フェイト「裕也でしたらバイトです」

まゆき「ああ、そうだつたね、翠屋だつて？」

フェイト「はい、そうです」

翠屋みどりやとは正式名称を喫茶翠屋きっさみどりやと言い、なのは家の高町家たかまちが家族で経営している年中無休の喫茶店だ。

フェイト「で、まゆき先輩、義之を連れてきたのはどうしてですか？」

まゆき「ああ、そうだつた」

義之「忘れられてた!？」

連れてきたのはまゆき先輩なのに!？」

まゆき「ごめん、ごめん、実はさ弟くんに大事な話があつてね」

そう言つて、まゆき先輩は真剣な表情をして俺の方に視線を向けた。うーむ、大事な話ね・・・、想像がつかん

まゆき「ま、単刀直入に言つわ、弟くん、生徒会の仕事、手伝わない？」

義之「・・・、はあ？」

フェイト「ふえ!？」

あまりに予想外な展開に俺もフェイトも間抜けな声を出してしまつ

た。

まゆき「いわゆるヘッドハンティングってやつ？ 弟くんの力を生徒会に貸して欲しいの」

義之「いや、その……」

予想外すぎるまゆき先輩の提案に思考が空回りする

まゆき「基本的にね、あたしは認めてるの。弟くんを筆頭に杉並、板橋、雪村や花咲たち付属3年3組の連中の能力の高さはね、だからこそやつかいなのよ。その能力の使い方を徹底的に間違えてるしフェイト「あはは……」

いや、そんなことを言われても。

つてか、そもそも俺を筆頭にしないでほしい。(俺は戦 B A A R Aの眼帯の独眼竜ではない)

まゆき「ぶつちやけ、手が回らないのよね。今の生徒会のメンバーだけじゃ、数はそこそこ居るけど、能力的にはあんたたちに敵わないから、だから、弟くんに目をつけたわけ」

義之「……なんで、俺なんですか？」

まゆき「んなもん、決まってるじゃない。1番落としやすいからよ、音姫おとめが苦労しているのは弟くんも知ってるでしょ？ さっきのやりとりを見てもわかるとおり、通常業務だけでも音姫にかかってくる負担ってのは相当大きい、さらにクリパでは色々と問題が起きるからね」

そう言つて、まゆき先輩はジト目で俺を見る。

義之「だから、俺は音姉おとねえに迷惑をかけるようなことはしないって」

まゆき「それじゃあ、意味がないのよ、弟くん自身はそう思ってるかもしれないけど、杉並や雪村は弟くんを利用しようとするわ」

義之「それは、まあ……」

あいつら、なにかことがあるたびに俺に接触してくるしな。

まゆき「気がついたら、知らぬ間に弟くんが計画の中心に仕立てられている可能性も考慮できる、なんだかんだ言つて、弟くんの影響力はバカにならないからね。本人にその気も、自覚もないとしても

さ、んで、生徒会としては、その可能性がある限り、弟くんのマークを外す訳にはいかないのよねえ、それも、危険ランクAだから、それなりの人員の割り当てが必要だし」

義之「……………」

フェイト「あははは……………はあ」

まゆき「だったらさ、弟くんをさ、生徒会（こっち）に取り込んだらどうが安心でしょ、基本的能力が高い上にランクAの人物たちとも接点が多い、言ってしまうえば、首輪の鈴としては最適な人材なんだよね」

義之「……………」

まゆき「それに、弟くん。音姫のために騒ぎを起こさないって言うけど……………ほんとのところさ、少し物足りなさを感じてるんじゃない？ 本来はさ、生徒会側（こっち）の人間なんだし」

そう言つて、まゆき先輩は挑発的な笑みを浮かべた。微妙に反論できない感情があるところが少し悔しい。

まゆき「だったらさ、正しい側の方で正々堂々と大暴れすればいいじゃない、きつと、音姫も喜ぶと思うよ、すつごく甘ったるい笑顔で、弟くん、一緒に頑張ろうね」とか言っちゃってさ」

頭の中に、まさにその映像が思い浮かんだ。

音姉のことを言われると、ちよつと弱いな。

確かに、色々迷惑とか掛けてきたし。

手助けしてあげたいって気持ちも確かにある。

まゆき「ま、あたしが言いたいのはそれだけ、嫌なら嫌で、断つてくれてもだけどさ」

そう言いながら、まゆき先輩は指をコキコキと指を鳴らす。

フェイト「まゆき先輩!？」

義之「そ、それって脅迫って言っんじゃない」

まゆき「おほほ、人聞きの悪いこと言わないでよ。これは、交渉よ」
圧倒的力関係の差がある状況で、なにが交渉なんだろうか。

フェイトもまゆき先輩の後ろでごめんって両手合わせて頭下げてるし
まゆき「ってことで、もう1回聞いわ。弟くん、生徒会の仕事、手

伝わらない？ とりあえずクリパの期間だけでいいから」

そう言つて、まゆき先輩は小首をかしげた。

義之「……………」

生徒会の手伝いね。

正直、この展開は全然考えてなかったな。

普通にクラスの連中とクラス出展するつもりでいたからな。

例のセクシー寿司パーティーがどう転がるのかの予想が全然できないけど。

ま、でも、生徒会の手伝いをするという選択も悪くないのかもしれない。

音姉の助けができるってのは大きいしな。

少し面倒くさいって気持ちもあるけどさ。

義之「……………」

俺は少し考えた後、まゆき先輩に答えを返した

義之「申し訳ないですけど遠慮させていただきます。」

俺は自分の気持ちに素直に応えた。

まゆき「ふうん、このあたしが頼んでるのに断るんだ？」

まゆき先輩の目がスーツと細められる。

猛禽類が獲物を狙う時のような目。

つて言うか、完璧に脅迫だよなあ、これ。

思わず、やらせていただきますと答えたくなくなってしまふ。

フェイト「それじゃ、脅迫ですよ、まゆき先輩……」

まゆき「なにか言つた？」

フェイト「いえ、なにも……………」

フェイトは下を向いた

義之「やりません」

俺は念のためにもう1回言つた

何よりせつかくのクリライフを生徒会の手伝いで棒に振りたくない。

俺が言うと、まゆき先輩の顔が近づいてきた。

まゆき「……………」

義之「……………」

少しの間、見つめあう。

まゆき「……………」

と言っか、にらみ合っか？

戦力的に圧倒的な差があるので、にらみ合いにならないけど。

まゆき「……………」

ってか、距離が近いですって！

吐息のかかる距離でまゆき先輩はじつと俺の目を覗き込んでいる。

きりつとした綺麗な顔立ちで間近に迫られて、思わず視線を逸らしてしまう。

なんか、いい匂いするし。

まゆき「やっぱだめか」

まゆき先輩がふつと、表情を和らげた。

まゆき「うーん、残念」

義之「すみません」

まゆき「いや、別にあやまんなくてもいいよ。最初から無理だろうなあ〜って思ってたから、っか、もし手伝ってもらえたらラッキー〜くらいのイメージでいたからさ、弟くんには弟くんの都合があるもんね」

義之「そりゃ、まあ」

まゆき「んじゃ、今日は帰っていいよ。時間とらせてごめんね」

義之「はい、失礼します」

俺はまゆき先輩とフェイトにお辞儀をして、回れ右をする。

まゆき「ま、気が向いたらいつでも訪ねてきてよ、生徒会はいつでも弟くんの手助けを待ってるからね」

俺はまゆき先輩の声を背中に聴いて生徒会室を後にした。

ヘッドハンティング（後書き）

義之「まさか、生徒会に誘われるとは予想外だったな、ん？ あれは由夢か？」

由夢「兄さん一緒に帰りましょ」

それぞれの日常　そして・・・(前書き)

音姫おとめ「弟くん、みりん取って？」
義之「あい」

それぞれの日常　そして・・・

義之 side

俺たちは今、2人で台所に立ち料理していた。

これが俺達の日常だ。

ぐつぐつと音を立てる鍋から、煮物のいい香りが漂ってくる。

音姫「ん〜、もう一味かな？」

義之「ほい醤油しゅうゆ」

俺は音姉おとねえが欲しいものを予測して手渡した。

音姫「ありがと」

当たったようで、音姉が醤油で味を整える。

おたまで煮汁をひとすくいして、軽く味見。

音姫「うん。いい感じ、いい感じ　はい、弟くん。どうかな？」

口元におたまを寄せられる。

音姫「あ〜ん」

義之「あ〜んとか言うな」

俺は、若干気恥ずかしくなりながら言った。

ずずつと、中の煮汁をすすする。

口の中に醤油とみりんの柔らかい味が広がった。

文句なしの味付けだ。

流石は音姉。

義之「うん、おいしい」

俺は素直に賞賛した。

音姫「よし、完成」

コンロの火を止めて音姉がにっこりと微笑む。

音姫「お魚の方はどう？」

義之「いい感じに焼けてるよ」

俺はグリルを覗きながら答えた。

音姉とふたりでの夕食作り。

別段珍しいことでもなくて、もう日常の風景となっていた。

夕食時になると隣の朝倉家からやってきては一緒にご飯を作って、食べて、団欒だんらんして、そして帰る。

俺が芳野家よしに移り住んでからもう半年以上、ほぼ毎日のように繰り返されてきた日常だ。

こんな日常もまあ悪くないと思う。

義之「おい由夢、皿の用意しろ」

もうひとり。

俺は、たぶん居間でぐでぐでとしているだろう由夢に声をかける。

由夢「え、かつたるい」

と、予想通りのなんとも情けない返事が返ってきた瞬間。

音姫「由夢ちゃん！」

と音姉の叱責が飛んだ。

由夢「や、冗談ですってば」

いかにもかつたるそうな台所にやってくる由夢。

その姿は、ジャージにメガネとリラックスしきった格好。

学校での姿とのギャップが激しいと言うかなんと言うか。

因みにこっちの方が由夢の本性だ。

由夢「や、それにしてもおふたりさん、お似合いだね。まさに新婚

さんって感じですか？」

何時もの対音姉の言葉を言う由夢

音姫「し、新婚さん、な、なに言ってるのよ由夢ちゃん。やだな

」(テレ)」

隣でもじもじとエプロンの裾すそを弄りだす音姉。

なにを照れてるんだかこの人は。

由夢「妹としましては、仲の良いおふたりの至福の時間を邪魔してしまうのはいかなものかとちょっと考えてしまっわけです」

義之「はいはい、いいからとつと皿の用意しろ」

俺は、おふざけとわかってる由夢の言葉を軽くスルーして、由夢に促した

由夢「はい。兄さんはノリ悪いなー」
ほらな

由夢の（洪々）用意したさらに料理を盛り付けていく。
肉じゃがに、塩鮭。それとご飯に味噌汁と。

音姫「そんな、新婚さんだなんて……」

隣では音姉がどこか遠くの世界に旅立っていた。

いい加減に帰って来い。

そして俺達のご飯を食べながら、クリパのことや、委員長のことを話したりした。

義之 side END

裕也 side

裕也「ありがとうございます、またお越しく下さいませ！」

俺はレジで精算して帰るお客様に何時ものセリフを言って頭を下
げた。

？「裕也くんお疲れ」

？「お疲れ」

？「お疲れさま」

そう、俺に声をかけてくれたのは、なのはの父親の高町士郎さんと、
お兄さんの高町恭也さん、それにお姉さんの高町美由希さん、そし
て母親の高町桃子さんだ。

裕也「お疲れ様です」

俺は同じように返事をした。

なのは「裕也君お疲れ様」

そう言いながら、なのはがキッチンの奥から現れた。

なのは現在ここ喫茶翠屋の2代目の店長になるべく修行中の身だ。え？ 本当ならばお姉さんの美由希さんがなるはずだって？ それはダメです。美由希さんが料理を作ると、大抵殺人級の料理に化けてしまうのだ。(美由希さんが作ったお菓子が原因で、以前俺は4時間意識不明になった。)

桃子「それじゃ、今日はもう閉店ね」

そう言つて桃子さんはドアの札を「OPEN」から「CLOSE」に変更した。

桃子「皆さん今日もお疲れ様でした」

全員「…………お疲れ様でした！…………」

俺たちは店長である、桃子さんの前に整列した。

ここ喫茶翠屋では土郎さんではなく、桃子さんが店長だ。

桃子「それじゃあ、忍ちゃん、お願いね？」

桃子さんがそう言つと、俺の右の6番目、一番端に立っていた月村忍しんぶさんが前に立った。

忍「皆さん、今日もお疲れ様でした」

全員「…………お疲れ様でした！…………」

忍「それでは、明日のバイトの方の出勤者の確認をします。まずは有村さんに次に…………」

なんで、高町家ではない忍さんがそんなことをやっているかと言うと、忍さんはここ喫茶翠屋のチーフウエイトレスで、バイトの人達の出勤などを確認したり、桃子さんの代わりにフロアでの指示出しなどをするのが仕事だ。

因みに忍さんは資産家のお嬢様であり、なのはの兄の恭也さんの恋人だ。

そして、忍さんの確認も終わり

桃子「それでは、今日はこれまで、皆さん明日も頑張りましょう！」

全員「…………はい！…………」

解散になった。

俺がスタッフルームで着替えて帰宅しようとした時だった。

士郎「裕也くん」

と士郎さんが他の皆に聞こえないように耳打ちしてきた

士郎「あまり、無理はしないように、もし君になにかあったら、幸ゆ也さんと彰子あきこさんに申し訳が立たない」

と言われて

裕也「俺は自分の”罪”を償うまでは死ねませんから」

と言つて俺は翠屋を出た

裕也 side 一時アウト

士郎 side

士郎「あれ”は君のせいなんかではないのにな・・・”

私、高町士郎は帰宅する裕也くんの背中を見ながら呟くことしか出来なかった。

士郎 side END

裕也 side 復活

裕也「寒いな・・・」

流石に夜の10時は寒くてマフラーを口元まで上げた。

と、その時だった、ポケットの中に入れていた携帯が震えた。

裕也「誰だ？」

俺は携帯を開いて確認した。

裕也「メールか」

俺はメールのアイコンをクリックしてパスワードを入力した。

裕也「！」

差出人は「J・S」だけ書かれており、そしてメールの本文には画面いっぱい「黒」だけが映り、しばらくボタンで下にスクロールすると、10桁の数字が書かれている。

裕也「任務か」

俺はそう言いながら10桁の数字を押して通話ボタンを押した。

？「やあ、ちゃんとメールがいったようでよかったよ」

裕也「ドクター、今日の任務の場所は？」

？「場所は風見湾の倉庫群の7番倉庫だよ、装備はすでにウエンデ
イに運ばせた」

裕也「わかった、すぐに向かう」

？「頼むよ、ガーディアン守護者よ」

と言い通話は切れた、俺は携帯をポケットに突っ込むと目的地に向
かい走り出した。

走り出して約10分後、俺は目的地の風見湾のすぐそばに着いた。

？「裕也、こつちツスよ」

と聞こえたので声のほうを向くと、そこには肩あたりまで伸ばした
赤い髪を後頭部に纏めた俺と同じ年くらいの女の子がいた、この子
が先ほど言われたウエンデイだ。

裕也「ウエンデイ、装備は？」

ウエンデイ「ここにあるツスよ」

と手渡された銀色のトランクを、俺は留め金を外して開けて中身を
確認した。

裕也「確かに、確認した、着替えるか」

と言い俺は周囲を確認して手ごろな小屋を見つけた。

そして中に入り、俺は着ていた制服を脱いでトランクに入っていた
黒一色の服を身に纏い、腰には銃を装備して脇には銃の予備マガジ
ンをつけて、頭から足元までスッポリと覆う黒いマントを纏い、最

後は顔に目元に赤い涙のような模様の書かれた白い仮面を着けてから外に出て、ウエンディを見て。
裕也「ゼストさんは？」
と聞くと
ウエンディ「既に展開済みッス」
裕也「よし、では行こうか」
と、俺は7と書かれた倉庫を見た。

第3者 side

倉庫の外には2台の黒塗りの車が停車していて、倉庫のドアの近くには夜なのにサングラスをかけた男達が周囲に目を光らせていた。

そして暗い倉庫の中、大きな木箱を机代わりにして、木箱の上にはランタンが置かれ、木箱の周囲にイスに座った2人を含めて20数人の男達がいた。

男1「で、例の物は？」

と右側に座っていた男が前に居る男に聞いた。

男2「そう焦るな、ブツはあそこだ」

と左側に座っていた男が後ろにある布に覆われた箱状のものをみると近くにいた男の部下が布を取り払った。

男1「確かに、確認した」

と、箱状のケージを見ながら言った。ケージの中には数人の小さな子供がお互いの身体を抱き合いながら、すすり泣いていた。

右側の男が足元から同じようなトランクを木箱の上に置いた。
瞬間だった。

倉庫の巨大なシャッターが轟音と共に吹き飛んだ。

男1 & 2 「な、何事だ!!!」

炎の中から1人の黒尽くめの人間が現れた。

裕也 「貴様たちの処刑人だよ」

男1 「外にいた連中はどうしやがった!!!」

と男が問いたですと

裕也 「ああ、それは”これ”のことか？」

と裕也（相手は気付いてない）は右手に持っていた球状の物を男達の方に投げた。

”それ”は1人の男の首だった。

男1 & 2 「てめえ!!!」

男が声を張り上げると、周囲に居た部たちが懐から銃を取り出した。しかし、気付くと裕也は居ない。

裕也 「遅い」

裕也の右手には先ほどまでは持っていなかった1本の刀が存在して、1人の男の後ろに立っていた。

そして次の瞬間には男の首が切り飛ばされて、血が噴水のように噴き出した。

そこからは一方的な蹂躪だった、ある男は頭から縦に切り裂かれて、もう1人は胴体を腰から両断されて絶命していく。

そして銃声と肉を切り裂く音が響く。

しかし、裕也の刀はまるで舞うかのように剣閃が走った。

そして爆発から8分後、倉庫内外問わず男達の死体が転がった。

？「相変わらず速いな」

裕也は声のほうを見ると、いまだ燃えているシャッター跡の炎が燃えていない場所に1人のガタイのよく茶色いコートを羽織り、左腕に手甲を装備していて、左手に巨大な槍のデバイスを持った中年の男性が居た。

裕也 「ゼストさんですよ、そちらも終わったようですね」

男性、ゼストは倉庫の周囲に展開していた戦力の掃討を担当していた。

その証拠に槍型デバイスからは血が滴っている。

ゼスト「ああ、しかし数ばかりだったな」

ゼストはそう言いながら、槍を振るい血を飛ばした。

ウエンディ「おや？ あたしが最後でしたか」

とウエンディがシャッターから先ほど別れたウエンディが居た、違
うのは右手にまるでサーフボードの様な専用複合兵装の「ライディ
ング・ボード」を所持していた。

そしてウエンディが裕也の近くに來た瞬間、裕也の”左目”がある
”幻視”ビジョンが見えた。

裕也（これは！！）

その幻視は目の前に居るウエンディが身体をくの字に曲げて倒れる
映像だった。

ウエンディ「裕也？ どうしたツスカ？」

と次の瞬間にはウエンディが自分に近づいている。

裕也「ウエンディ！」

と裕也はウエンディをタツクルしていた。

次の瞬間”死の羽音”が連続して響き、裕也の身体から血が霧のよ
うに噴き出した。

ウエンディ「裕也！？」

ウエンディが体勢を立て直しながら叫んだ。

そしてゼストは銃弾が飛んできた方向、つまりシャッターの方を見
るとそこには1人の男が手に自動小銃アサルトライフルを持っていた。

男3「殺された仲間の仇だー！」

と男は銃撃を再開した。

ゼストはバックステップして避け、ウエンディはライディング・ボ
ードを楯のように構えて倒れた裕也の前に躍り出た。

ウエンディ（このままじゃ攻撃できないツス！）

とウエンディが危惧した瞬間

？「IS発動、ランブル・トルネイダー！」
インテリジェントスキル

と聞こえて続いて爆発音が響いた。

ウエンディ「チンク姉^{ねえ}！」

先ほどまで男が立っていた場所には粉みじんになった男の肉片が飛び散り、近くには小柄な体躯に腰まで伸ばした銀髪、右目に眼帯を着けた少女、ウエンディの姉のチンクが居た。

チンク「ウエンディ、ゼスト撤収するぞ、ウエンディは裕也をドクターの所へ」

ゼスト「ああ」

ウエンディ「わかったツス！」

ウエンディは持っていたライディング・ボードを地面に置くと浮き上がり倒れた裕也を抱えながらウエンディは、ライディング・ボードに乗ると

ウエンディ「ISエアリアルレイブ発動！」

と言うとライディング・ボードは高速で飛び始めて空に消えた。

遠くからはパトカーのサイレンが聞こえ始めていた。

それぞれの日常　そして・・・（後書き）

ウエンディ「裕也すぐにドクターの所に連れて行くッスから頑張るッスよ！」

治療と裕也の・・・(前書き)

裕也「ウエンディ・・・俺は置いていけ・・・」
ウエンディ「何を言ってるっすか！」

治療と裕也の・・・

第3者side

裕也「ウエンディ・・・俺は置いていけ・・・」

と、ウエンディの背中で息絶え絶えになっている裕也が言った。

ウエンディ「何を言ってるっすか！」

裕也の言葉を聞いたウエンディは思わず叫んでしまった。

裕也「俺は簡単には”死なない”知ってるだろ？」

ウエンディ「知ってるっすけど・・・！」

確かに裕也はとある理由で簡単には死なない、しかし今は12月でしかも夜だ、気温は0 近い。

しかも、ウエンディは気付き始めていた。

ウエンディ（裕也の体温が低下し始めている！）

下手したら裕也が死んでしまう可能性が高い。

ウエンディ「もう少しでドクターのところに着くっすから！」

ライディング・ボードで移動し始めてもうすぐ10分経過する、距離的にはもうすぐのはずだ。

と、遠くに見覚えのある建物が見え始めた。

ウエンディ「見えた！！」

ウエンディは内心で喜んだ

ウエンディ（これで裕也を助けられるっす！！）

そして、建物の近くでウエンディはボードから降りた。

建物の壁には看板が着いており、看板には「町医者 無限の欲望

J・S 医院」と書いてあった。

因みに裕也はこの看板を見るたびに「もう少しマトモな名前は思いつかなかったのか」と言う。

ウエンディはボードを壁に立てかけて、建物の裏手に回った。

すると、勝手口が開き、中から1人の男が顔を見せた

？「入れ、準備は整っている！」

男は髪の毛は紫で肩あたりまで伸ばしており、眼の色は黄色、この男の名前はジェイル・スカリエツティと言う

ウエンディ「ドクター！ 裕也が、裕也が！！」

と、ウエンディは背中に背負っていた裕也をスカリエツティに見せた。

スカリエツティ「わかっている、早く入れ」

ウエンディは中に入った。

中は仕切りによって細かく区切られており、部屋ごとにベッドや診察台が置いてある。

スカリエツティはそれらは無視して、さらに奥に進む。

奥には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたドアがあった。

スカリエツティはそのドアを開ける、そこにはロッカーが並んでおり、一番奥のロッカーには「使用禁止」の札が貼ってある。

スカリエツティはそのロッカーの鍵を開錠して開けた、すると中には地下に続く階段が存在した。

狭かったのは入り口のみで、中は広がった。

少し降りると、下に光が見えた、そして光りを超えるとそこには広大な空間が広がっていた。

奥の壁には巨大なモニターが光っており、画面には様々な情報が流れている。

そして中央には手術台のようなベッドが置いてあり、その周囲には治療道具が台車で置いてある。

スカリエツティ「そこに裕也くんを寝かせたまえ」

とスカリエツティはベッドを指差した。

ウエンディ「了解つす、裕也少し我慢するつすよ」

ウエンディはなるべく裕也にダメージを与えないように優しく寝かせた。

裕也の傷は遠めに見ても重傷で、左半身に集中しており特にわき腹が酷い。

スカリエツティ「ふむ、既に再生が始まっているが鈍いな、ウーノ

輸血の準備を！」

と、スカリエツティは右手の壁際に居る薄い紫色の髪の毛が特徴の女性、ウーノに言った。

ウーノ「わかりました、A型でしたね？」

ウーノは棚の引き出しから輸血パックを取り出し、それを台車のトレーに置きながら聞いた。

スカリエツティ「それと、糸と針、後は包帯も頼む」

スカリエツティは続いて指示を出し、ウーノは指示に従い取り出した道具をトレーに置いていく。

スカリエツティ「さてと、治療を始めようか」

と、スカリエツティは言うのと、治療を始めた。

そして、約1時間後

スカリエツティ「ふう、これで大丈夫だ」

スカリエツティは持っていた針を置きながら言った。

ウーノ「この傷は全て銃創ですね、彼が被弾するなんて珍しいですね？」

ウーノは包帯を巻きながら驚いていた、それは裕也の戦闘力と戦闘技術を知ってるが故だった。

ウエンディ「裕也は・・・あたしを庇ったからっす・・・」

と、入り口そばの影になっている所にウエンディが座り込んでいた。ウエンディ「あたしが気付かなかったから・・・裕也は・・・！」

ウエンディは涙を滲ませながら叫ぶ様に言った。

スカリエツティ「いたし方あるまい、まさか1人だけ生き残ってるとは思わなかった」

裕也を撃った男は、偶然生き残っていた男だったのだ。

ウエンディ「それでも、あたしが気付かないといけなかったのに！

！」

叫びながらウエンディは拳を血が滲むほど握り締めた。

裕也「仕方ないだろ・・・偶然見えたんだ・・・」

裕也は痛みを堪えるように喋りながら、起き上がった。

ウエンディ「裕也起きちゃだめっすよ！！」

ウエンディはすぐに駆け寄って裕也を支えた。

スカリエツティ「見えた”のは”左目”だね？」

裕也「・・・はい」

裕也はスカリエツティの質問にゆっくりと返事をした。

ウエンディ「左目ってことは”アイオンの眼”っすか!？」

裕也「ああ」

裕也はベッドから降りた。

裕也「流石はドクターですね、もうほとんど治ってる」

スカリエツティ「帰るのかね？」

裕也「はい、エリオとキャロが待ってますから」

と、裕也は自分の格好を見て気付いた。

裕也「しまった、制服と荷物忘れた」

裕也が頭を掻いてると

チンク「これだろ、回収しておいた」

と、裕也の隣にチンクが来て、装備の入っていたトランクと風見学

園の指定カバンを手渡した。

裕也「ありがとう、チンク」

と、裕也は受け取ると、制服に着替えて階段に向かう。

スカリエツティ「治療したとはいえ、2日間は無理しないように」

裕也「わかりました」

裕也は入り口で返事をする、そのまま階段が上がっていった。

そして、裕也が去ってドアが閉まる音が聞こえると

スカリエツティ「さて、裕也くんが怪我してしまったので、しばらく

の間は君達頼んだよ？」

と、スカリエツティは室内に居る全員に言った。

全員「……はい！」「……」

全員返事をする、階段を上って去っていった。

それを確認したスカリエッツィは近くにあった、パソコンを設置してある机のイスに座った。

スカリエッツィ「ふう」

と、ため息を吐いた時だった、パソコンの画面に電話のマークが現れた。

スカリエッツィはその電話マークをクリックした、すると画面に水色の髪の毛が特徴の若い女性が映った。

スカリエッツィ「やあ、リンディ」

そう、その女性の名前はリンディ・ハラウンと言いフェイトとアリシア、そしてクロノの母親である、しかしクロノたちの年齢を考えると40歳は超えてるはずなのだが、見た目が30前半か下手すると20代後半にしか見えない。

リンディ「今、警察（しゅち）の現場検証が終わったわ」

リンディは警察のとある機関の課長なのだ。

スカリエッツィ「ふむ、それでどうだったかね？」

リンディ「ええ、今回も”連中”の関与があったわね、それと子供たちは全員保護したわ」

スカリエッツィ「そうか」

スカリエッツィがうなずくと

リンディ「裕也君怪我したわね？」

スカリエッツィ「ああ、うちのウェンディを敵の銃撃から庇ったんだ、”アイオンの眼”で気付いてね」

それを聞いたリンディは画面の向こうで驚いた顔をして

リンディ「アイオンの眼”を！？」

スカリエッツィ「ああ、先ほど帰宅したがね」

リンディ「そう……、それと先ほど土郎さんから気になる電話を聞いたのよ」

スカリエッツィ「気になる電話？」

リンディ『裕也君ね、「俺は自分の”罪”を償うまでは死ねませんから」って言ったそうよ』

スカリエツティ「そうか……」あれ”は彼も被害者なのにな……”

そう言つてスカリエツティは机の右端に立っている写真たてを見る、その写真にはリンディとクロノに似た男性とスカリエツティ、そして裕也の両親を含めて10数人が写っている。

リンディ『あれ”からもう9年なのね……”』

スカリエツティ「ああ、そして脱走から11年だ」

スカリエツティはそう言つて引き出しを開けた。

そこには1冊のぶ厚いファイルがあった。

スカリエツティはそれを出して机に置いた。

表紙には「人工アイオンの眼移植計画」と書いてある、スカリエツティは表紙を捲った。

そこには今から13年前の日付が書かれている。

スカリエツティはそれを無視してページを高速で捲った。

そしてとあるページで止まる、そこには「人工アイオンの眼被検体候補者」と書かれており、下には「尚、被検体たちには人工アイオンの眼を使いこなさせるために強化手術を施す」と書いてあった。

スカリエツティ「私も愚かだったよ」

リンディ『……』

スカリエツティは自嘲的な笑みを浮かべてさらにページを捲るすると1人の赤ちゃんの写真が写っているページで止まる。

その赤ちゃんはどこか裕也に似ている、しかし本来名前が書かれている場所には「被検体N0 E-666」とだけ書かれている。

スカリエツティ「彼は最大の被害者なのにな……」

と、スカリエツティはイスの背もたれに寄りかかり上を見上げた。

リンディ『ええ……』

リンディもそれに賛同していた……

治療と裕也の・・・（後書き）

リンディ「誰か、裕也君を助けてあげて・・・」

エリカ・ムラサキのデバイス決定（前書き）

碧さん案をくれてありがとうございます！！

エリカ・ムラサキのデバイス決定

此度エリカ・ムラサキのデバイスが決定したのをお知らせします。能力と名前は以下の通りです。

ヘキサペンタ（名前の由来は六芒星と五芒星から）

バリアジャケットの形トランプのクイーンの服を白基調に変更したもので、肘まで覆う手袋と膝まであるブーツ。

五芒星形のビットが胸、両手の甲と両足の甲に着いている。

武器はクイーンズスタッフ、トランプのクイーンが持っている杖を薄紫色に変更している、杖の両端に六芒星のビットが3つずつ着いている。

使用魔法王族であるエリカ・ムラサキのデバイスのため防御に特化している、計11個あるビットは攻撃力は皆無に等しく3個で面を形成するとAランク攻撃を完全に防げる程の防御壁を張ることが出来る

使用するビットを増やせば防御力と範囲は広げることが出来る。

11機すべて使えば学園を護ることも可能。

ただし、ビットがムラサキ本人から離れるほど機動力と防御力が低下するため、だいたい100mから200mで使われる、最大で5キロほど離れてる距離でも防御壁を形成できるが防御力は低くくなってしまう。

カートリッジシステムは現在は搭載していないがムラサキ本人は搭載する気のようにだ。

因みに攻撃力が皆無に等しい事に焦りを感じたムラサキ本人の要請によりクイーンズスタッフは端に鎌のように魔力刃を形成するように改修してある、モードチェンジによって鞭のようにも使える。

ムラサキは2つをあわせた鎖鎌も使えるようになっており、両端にするか悩んでいるもよう。

五芒星のビットには偵察機能が、六芒星のビットは封印の機能が着

いている。

11機全てを使った最大防御力はプロテクト・ブレイク機能が着いているスターライト・ブレイカーすら防ぎきることが可能

攻撃力は一般のストレンジバイスにすら劣る、なお誘導弾の攻撃力は低い誘導性は非常に高い。

得意なレンジは撤退戦闘と封印作業及び偵察任務だがムラサキの能力により近接戦闘も可能。

AI名はグラーマ、口うるさい婆やのような存在だが、基本的にはムラサキの決定に従うが説教したり助言する。

ムラサキの生存を最優先にしているために時々ムラサキの命令を無視してしまうこともある。

エリカ・ムラサキのデバイス決定（後書き）

ムラサキ「皆さんありがとうございますわー！」

新しい出会い その2 (前書き)

義之「どうすっかな？」

新しい出会い その2

義之 side

涉「うっす、義之！」

やたらとテンションの高い声と共に、後ろから肩を叩かれる。

振り返ると見慣れた（アホ）顔。

義之「ああ、涉か。おはよ」

涉「ん？ どうした？ なんかテンション低くね？」

義之「んな、朝っぱらからテンションあげられるかよ」

大体、俺はそんなキャラじゃないし。

涉「マジかよ。俺なんか今日、朝からすげーわくわくして、めっっちゃ早起きしちゃったって言うのに！ ってことで、さっそく行こうぜー」

そのまま涉は教室とは反対方向へと歩いていく。

義之「行ってくつて、どこ行くんだよ？ 教室、そっちじゃねえぞ」

俺は方向音痴にでもなったのか、筋違いな方向へと歩く涉を呼び止めた。

涉「はあ？ なに言ってるんだよ義之くん、行ってくつたら見学に決まってるだろ？」

義之「見学？」

涉「ああ」

義之「なんの？」

涉「転校生だよ、転校生。今日、うちの学校に転校生がふたり来るつて。義之も聞いてるだろ？」

義之「いや、知らん」

俺は正直に答えた。

涉「ちょあ、マジかよ！ お前な、あんなだけ噂になってるのに、つか、非公式新聞、読んでないのか？」

義之「読むわけないだろ」

あんな怪しいの。

涉「マジでっ！」

うるさい。

驚きの表情を浮かべる涉。

つてか、本当に読んでるヤツがいたことの方が驚きだよ。

杉並のヤツの満足そうな顔が一瞬、脳裏に浮かんで、少し嫌な気分になる。

義之「んで、その転校生はウチのクラスに来るのか？」

俺は正直な質問をぶつけた。

涉「いや。ふたりとも付属だけど、ひとりは2年、もうひとりは1年だつてさ」

だったら俺が知るわけないがな。

涉「なんでも、ふたりともかなりの美少女らしいぞ、この時期に転校してくる下級生。しかも美少女！ たまらんなあ、義之！」

そう言つて、ぐへへとだらしない（放送ギリギリ）笑みを浮かべる。つたく、朝からホント元気なやつだ。

涉「だから、ほら、早速行こうぜ。職員室」

自首しにか？

義之「いや、俺はいいよ。そんな興味ないし」

涉「はあ、なに言つてんの、お前？ 美少女がふたりも来るんだぞ

？ それを、それをーっ！ 興味がないとおっしゃるのですか、

あなたは！」

ぐいつと身を乗り出してくる。

呼吸も荒く（まるでドコゾの変態みたいに）。

涉「あ、そーですか。そーいうことですか、義之さん、まあ、すでにモテモテの義之さんには、転校生なんて興味の対象になんてならないわけですね、転校生に期待を膨らませてる僕らを見て、冷やかな笑みを浮かべているわけですね、くきーっ！」

義之「べ、別にそういうわけじゃないけどさ」

てか、モテモテってなんだ

渉「だったら一緒に見学に行こうよ」

義之「いや、別にひとりで行けばいいだろうが」

渉「だ、だって、なんかひとりで見に行くの、ちょっと怖いじゃん、だから一緒に行こう。ね、義之くん」

身体をくねくねさせながら俺の手を取ってくる。

つてか、きもい。

つたく。

義之「わかったよ。行きゃいいんだろ、行きゃあ」

渉「おお、心の友よ」

そして、渉にがっしりと肩を組まれた。

ジャ アンか

渉「んでは、新しい出会いを求めて、れつつら」

渉に引つ張られるようにして、俺たちは職員室の方へと向かった。

渉「ありや？ 誰も居ない」

職員室前についたところで、渉がきよろきよろとあたりを見回す。

渉「おつかしな。俺の予想だと、職員室は転校生を一目見ようつ

て大勢の生徒でごった返しているはずなのに」

あほか

義之「みんながみんな、お前と同じ発想なわけないだろ？」

そうしないと、他の連中がかわいそうだ。

渉「んなこたーない！ 男って言うのは美少女転校生が来るって聞けば職員室まで見に来る生き物なんだよ」

義之「さいですか」

お前の思考が既に負け犬なのは気のせいかな？

ま、実際はひとりもないわけだが。

渉「おつかしな」

渉はそのまま職員室のドアの隙間から中を覗き込んだ。

どこぞのストーカーみたいだな。

義之「それらしいヤツはいるか？」

俺は覗き込んでる涉バカに聞いてみた。

涉「いや、なんの変哲もない職員室風景だな」
なんだよそれ

義之「転校生が来るってのは正しい情報なのか？」
俺は一応確認した。

涉「ああ、なんせ非公式新聞に書いてあったからな」
義之「……………」

バカだ、バカが居る！！

涉「な、なんだよ。その沈黙は」

お前が愚かだからだよ

義之「他の情報源は？」

まさか

涉「ない」

マジで真正のバカだ！！

義之「……………」

涉「あんだよ」

お前のバカさ加減に呆れてるんだよ！

義之「いや、別に……………」

俺は怒りたい気持ちを押さえ込んで返事をした。

確かに非公式新聞部……………ってか杉並の情報収集能力はすごいものがあるけど、それと同じくらい適ガセ当なことを言うからな。

ガセの可能性もあるってことか。

俺はポケットから携帯を取り出して時間を確認した。

もうすぐホームルームが始まる時間だった。

義之「とりあえず、一旦戻ろうぜ。その転校生の情報自体、正しいかどうかの判断がつかん」

ってか、これで遅刻でもしたらばかみたいだな。

涉「いや、俺はもうちょっとだけ」

そう言っつて、涉はもう一度職員室を覗きに行った。
しょうがない。

俺は教室の方へと足を向ける。

義之「んじゃ、俺は先に戻ってんぞ」

振り返って、渋にそう声をかけた瞬間だった。

?「あ!」

と、驚いた声

?「きゃ!」

ぽすんと胸元に衝撃。

そして、

義之「うわっ!」

そのまま俺の視界が天井を向いた。

身体が後ろに倒れる感覚。

どすっ!

痛え!

義之「あだっ!」

背中を打ち付けられる衝撃。

視界が暗転する。

義之「いててて」

そして、身体に押し掛かる重み。

右手のひらには柔らかい感触。

義之「ん? なんだ、この感触は?」

手のひらを握りこむように動かすと、その柔らかな物体も俺の手の動きにあわせて形を変える。

義之「・・・って」

視界が戻ってくると同時に、俺は状況を理解した。

?「あゝあ」

?「やつちやった・・・」

む? この声は?

俺は聞き覚えのある声に思考を向けてしまった。

女の子「・・・」

改めて俺は目の前の少女に視線と思考を戻した。

目の前には美少女の顔。

こんな状況でも思わず見惚れてしまつくらいの美少女だった。

義之「……………」

女の子「……………」

義之「……………」

女の子「で、あなたはいつまでわたしの胸を触ってらっしゃるつもりなのかしら?」

義之「あ、ご、ごめん!」

俺は慌てて右手を離れた。

女の子「……………」

目の前には、ぎろりと俺を睨んでいる女の子の顔。

女の子から発せられる、甘い匂いが鼻腔をついた。

女の子「……………」

義之「あつと、あの、最初に言っておく。わかっているとは思って、これは事故だからな」

女の子「……………」

義之「その、まあ、なんだ。とりあえず、一旦落ち着いて話をしようじゃないか」

女の子「……………」

義之「いや、その、キミが非常にご立腹だということも、感情がそこに到るまでの過程も十分と言っていていいほど理解しております。ただ、暴力では何も解決しないと思うんだ、とりあえず、その振り上げたまま、ふるふると怒りに打ち震えている右手を下ろしていただく……………」

裕也「義之、諦めろ」

フェイト「言い訳はかっこ悪いよ?」

やっぱりだめか

女の子「こんのおおおお、スケベおとこおおお!」

女の子の右腕が振り下ろされた。

義之「ちょ、ちよつと待つ!」

怒声と共に風を切る音が聞こえて、
パシン！

義之「ほげっつ！」

頬に強い衝撃が駆け抜けた。

一瞬、視界が今度はホワイトアウトする。

女の子「はあ、はあ、はあ……、もう、さいってー！」

女の子は怒声と共に立ち上がり

肩で息をしながら、俺を見下ろしている。

義之「いや、だからー」

俺は弁明しようとしたが

女の子「うるさい！！」

女の子は気付くとバリアジャケットを展開した。（設定はデバイス

決定を参照）

義之「ちよっ！？」

女の子の持っていた杖の上端にあった六芒星マークの小物が外れて、
そこから鎌の様な魔力刃が形成された。

裕也「やれやれ、フェイト、クロノさんに連絡して」

フェイト「わかった」

後ろからそんな声が聞こえたが、今の俺には意味は無い

女の子「死になさーいーい！」

女の子は魔力刃の形成された杖を俺めがけて振り下ろした、

が、次の瞬間

裕也「はい、そこまで」

と、聞こえて魔力刃は裕也の左手の人差し指と中指で止められていた。

義之 side END

第3者 side

裕也「はい、そこまで」

転校生の女の子が振り下ろした薄紫色の魔力刃は裕也の左手の人差し指と中指に挟まれて、義之の髪先寸前で止まっていた。

女の子「なっ!？」

しかも、女の子の首筋には刃渡り40cmほどの刀が向けられていた。

義之「助かった・・・」

女の子が驚き、義之が安堵していた。

裕也「流石にやりすぎだ、今回のは出会いがしらの事故だ、最初のビントは見逃したが”これ”は見逃せない」

裕也は左手で魔力刃を止めながら女の子を睨んだ。

フェイト「それに、校舎内でのデバイス展開は校則違反だよ?」

ほら、と、フェイトは生徒手帳を見せた。

そこには校舎内での校則第9条特別項目第12項<校舎内でのデバイス展開は緊急事態以外全面禁止>と書かれていて、その下には<尚、生徒会役員及び風紀委員は許可を得てからならば展開可能>と書いてある。

女の子「ですが!」

裕也「言い訳無用」

?<お嬢様、彼の言う通りでございます!>

女の子「グラーマまで!」

裕也は転校生が持つてる杖の中間を見た、そこには紫色の丸い宝石が埋まっております、それが点滅していた。

裕也「なるほど、インテリジェンスデバイスか」

グラーマ<それに彼の刀、かなり厄介ですよ>

女の子「どういうこと?」

グラーマ<私のプロテクションを切り裂きました>

女の子「な!?! グラーマのプロテクションを!?!」

裕也「やはり、防御特化型のデバイスか、他のプロテクションより硬かったからな、だがこの鉋切長光の刃には意味を成さないぞ？」
フェイト「切る」ことならば裕也の持つてゐる刃のなかでは最強だっけ？」

裕也「ああ、俺の知る限りだがな、今まで切れなかつたのは無かつたな」

その時だつた。

？「ここか？ デバイスを無断展開した転校生が居るといふのは」と、裕也たちの後ろの階段から耳が見えるくらいで切られた黒髪に若干童顔気味な男子が数名の風紀委員会役員を連れてやつてきた。

裕也「ええ、そうですね、クロノ先輩」

その人物の名前はクロノ・ハラオウン、名前で分かると思うがフェイトとアリシアの兄に当たる人物で、風紀委員会の副会長を務めてゐる。

更には風紀委員会精鋭部隊<アースラ>を率ゐる部隊長でもある。

クロノ「やれやれ、君達彼女を風紀委員会室まで連行」

風紀委員会役員「「はい！」」

裕也「義之と渉は教室へ戻れ、後、渉デバイスを展開しなくてよかつたな？」

渉の右手には渉のインテリジェンスデバイスの<ブリューナク>の待機形態の青いカードがあつた。

義之「先に戻つてゐるぞ？」

渉「おお、因みに展開してたらどうなつてた？」

渉は氣になつたのか、恐々とした様子で聞いてきた。

クロノ「最低でも反省文10枚だな、最高で30枚」

使う用紙は作文用の3000文字のものだ。

渉「マジで!？」

裕也「おおマジだ」

フェイト「うん」

義之「相変わらず、デタラメな刀を持つてゐることで」

裕也「ついでに、シグナム先生に生徒会関係の用事で少し遅れると伝言頼む」

フェイト「私も」

シグナム先生とは、裕也たち付属3年3組の担任で、体育教師のいつもジャージを着ているピンク色の長髪をポニーテールに纏めている女性だが、その正体は、はやての有する魔道書の「夜天の書」の守護騎士プログラムとやらで、まあ、人間に近い人工生命体だ。義之「わかった」

渉「任せとけ」

裕也&フェイト「頼んだ」

そうして、渉と義之は教室へ、裕也とフェイト、そしてクロノ達風紀委員会は風紀委員会室に向かった。

新しい出会い その2 (後書き)

クロノ「キリキリ歩け」

女の子「なぜ、わたしが・・・」

グラーマ<自業自得です>

お願いごと(前書き)

義之「昼飯だー」

涉「義之、急ぐぞ」

お願いごと

義之 side

俺と涉は今学食（学園食堂の略な）に来ていた。

義之「なんつーか、大盛況だな。相変わらず」

涉「所詮、我々学生は経済ヒエラルキーの最下層に位置しているからな、安い！ 早い！ 美味くないの三拍子揃った学食に人が集まるのは自然の流れだよ」

義之「切ない話だな」

まあ、涉はああ言ったものの、ごくまれに高いメニューや、出てくるのが遅いメニューがあつたりもするし、天文学的確率で超美味なメニューが出てくることもある。

そういう人間味あふれるところも、うちの学食が人気である理由なのかもしれない。

涉「あー、たまには職人技を遺憾なく発揮した薄切りのじゃなくて、ジューシーな肉が食いてー！」

義之「だったら、裕也みたいにバイトしたらどうだ？」

俺は至極まつとうなことを言うと

涉「学生の本分は学問です」

義之「お前が言っても、何の説得力もねえな」

だって、こいつ昼休み直前の授業で「環境問題について」の授業だったのになぜか大阪のたこ焼きについて熱く語ってたのだ、それで社会担当の戯利尊キャリケン先生からCマイナスの評価を得ていた、（え？

俺はどうしたって？ 聞くな・・・）

涉「うっせ。それよか、今日は何にすんだ？」

ふむ

義之「素うどん」

涉「うっわ。学食の中でも最もお買い得プライス商品かよ。わびしい奴だな」

うっせ

義之「そういうお前は？」

一応聞くか

涉「スープ ウィズ ウ・ダンヌ」

義之「・・・」

英語で言ってるが要するに・・・

涉「ってことで、素うどんふたつ買ってくるから、お前は席取って
いてくれ」

義之「りょーかい」

俺は席を確保に、涉は券売機に向かった。

涉と別れて分担作業する。

短い昼休み。効率よく過ごさないと。

義之「んつと」

俺は周囲を見回した。

きよるきよると食堂を見回す。

ほんと盛況なこと。

ぱつと見、空いてる席なんて無さそうなくらいの込み具合だ。

ふたりで座れそうなところは・・・つと、

義之「お、あそこが空いてるな」

俺は丁度よさそうな席を見つけたので、歩いて近づいた。

つて、

由夢「あ、兄さん」

お前か

隣の席で顔を上げたのは由夢だった。

由夢「こんなところでお会いするなんて奇遇ですね」

しゃんと背筋を伸ばして軽く首をかしげる。

パーフェクト
完璧な微笑み。

由夢「どうかありませんでした？」

そして丁寧口調。
ねこがぶり

家でのぐーたらな姿を知ってるから、こうきちんとした由夢を見る

のはなんとも気持ち悪い。

まあ、こいつの猫つかぶりは本格的だからな。

一体何人が騙されてるのか……

由夢「？」

由夢は計算されつくした角度で俺を見上げていた。

義之「相席いいか？」

いつまでも立ってるわけにはいかないのて聞いた。

由夢「はい、どうぞ」

席に座ろうとして、

義之「うげっ！」

俺は由夢の向かいに座っていた少女と目が合った。

美夏「ちっ！」

少女は盛大に舌打ちした。

これまた盛大な舌打ちで……

まさか、渉の言っていたふたりの転校生のもう片方って、

由夢「あら、もしかしておふたりはお知り合いでしたか？」

義之「あ、いや、知り合いってわけじゃないけど、一度会ったこと

があつて。名前とか知らないし」

由夢「そうですね。えっと、こちらはあまかせみなつ天枷美夏さん。今日、わたし

たちのクラスに転入してきたの」

やっぱり……

美夏「……」

由夢「この人は桜内義之。一学年上の3年生でわたしの兄みみたいな

ものかな」

美夏「……」

天枷はまったく無視を決め込んでいた。

由夢「あ、あははは……」

由夢（いったい天枷さんに何したのよ？）

由夢が小声で聞いてきた。

義之（いや、特になにも）

俺はとりあえず誤魔化した。

由夢（じゃあ、なんで天枷さん、あんなに不機嫌そうなのよ？）

義之（その件に関してはノーコメントとさせていたただきたい）

由夢

じと目で睨まれた。

そんな目で見られても、水越先生に口止めされてるからな。

たとえ口止めされてなかったとしても説明のしようが無いし。

実は彼女はロボットで、洞穴の中に安置されていたのをたまたま俺が起動してしまつて……。

アホか、言えるかこんなん。

言つたとして、誰が信じるつてんだ、こんな話。

つてか、もう二度と会うことはないと思つてたのに。

殴られかけたことを思い出して俺は少し冷や汗をかいた。

ちらりと様子をつかがうと、天枷は相変わらず俺なんて目に入らない様子で食事を続けている。

ん、なんとも気まずいね……。

あれから沈黙と共に食事は進み、かなりの気まずさが残つた。

食事中に何度か涉が勇敢にも会話を試みたが全て無視されて、今じや落ち込んでる。

天枷「ごちそうさま」

天枷が箸を置くと同時に手を合わせてお辞儀した。

そこは礼儀正しいんだな。

そして、脇に置いてあつた鞆を引き寄せると、中からバナナを取り出した。

つて、バナナ？

義之「へえ、天枷つてバナナが好きなんだ？」

あまりにも自然な行為に思わず言葉が出た。

美夏「・・・今なんて言った？」

その瞬間、空気が凍りついた。

怒気を含んだ声。

義之「あ、その、バナナ、好きなんだって・・・」

ヤバイ、地雷踏んだかも・・・

美夏「・・・貴様」

ほらね！

由夢と涉なんか視線を外してあからさまに我関せずって態度を取りやがった！

薄情者！！

美夏「どこの誰がバナナなんぞ好き好んで食べようかあっ！」

天枷はテーブルを叩きつけると同時に、俺を睨んだ。

美夏「・・・貴様、美夏の言葉を覚えてないようだな。」

覚えてっつて・・・なにを？

もしかして洞穴で言っただのか？

だったら、覚えてない！！

美夏「頭の悪い貴様にもう一度だけ教えてやるからしっかりと覚えとけ、美夏にはな、この世界で嫌いなものがふただけある。たつたふただけだ。ひとつはもちろん貴様たち人間。・・・そしてもうひとつが、バナナだ」

天枷は右手に握ったバナナを睨みつけながら、搾り出すように喋った。

だったら食うな。

美夏「できることならこの世界上からバナナなんてものを・・・」
その瞬間だった。

ピコン、ピコン、ピコン

突然、天枷の言葉を遮るように腕時計のようなものから電子音が鳴り響いた。

美夏「ちいいい！ バナナミンがつ！」

天枷は舌打ちすると、バナナの皮を剥いて噛り付いた。

そこからは、一心不乱に黙々と食べきった。

由夢と渉は呆然とそれを見つめていた。

因みに天枷は食べてる間ずっと不機嫌な顔だった。

なんなんだ、この子。

周りの連中は何事もなかったかのように、と言つか現実から目を背けるように日常にげに戻っている。

まったくもって訳が分からない。

義之（おい、由夢。天枷っていったいどんな子なんだ？）

由夢（わ、わたしに聞かないですよ）

俺達小声で話す。

義之（だって、お前クラスメイ・・・）

と、その時だった。

ピンポンパンポン

なんだ？

水越「えー、付属2年1組の天枷美夏さん、及び付属3年3組の桜内義之ちゃんと防人裕也くん、至急保健室まで来てください」

義之「・・・・・・・・」

なぜに？

天井に設置されたスピーカーから水越先生と思わしき声が聞こえた。

水越「繰り返し返します、付属2年1組の天枷美夏さん、及び付属3年3組の桜内義之ちゃんと防人裕也くん、至急保健室まで来てください」

ピンポンパンポン

義之「・・・・・・・・」

俺は無言で天枷を見た。

美夏「ふんっ！」

天枷は俺を無視するように身をひるがえすとトレーを返却して食堂からツカツカと出て行った。

俺は呆然と見送った。

渉「お前も呼ばれてるぞ」

義之「わかつてるよ」

由夢「また何かやらかしたんですか？」
じと目で睨まれる。

由夢「だいたい、兄さんと天枷さんの間でいったい何があったんです？ 天枷さん、あきらかにおかしかったし」

義之「別にないもないよ、ってか裕也は無視か！」

由夢「裕也さんは兄さんとは違いますから」

おのれ……

心当たりはあるけどさ。

ってか天枷や裕也と一緒に水越先生に呼び出されるなんて、そこはかとなく嫌な予感がするんだが。

かと言って逃げるわけにいかないしな。

あの時、仕事を手伝うって約束しちゃったし。

義之「はあ」

俺はトレーを返却してから天枷を追った。

第3者side

水越「いらっさ〜い」

保健室に入ると義之は水越先生ののん気な声としかつめ面した天枷、そして壁に背中を預けた裕也に出迎えられた。

水越「ま、ちよつとそこに座って」

指差す先。ベッドに義之は腰掛けた。

美夏「……………」

水越「わざわざ来てもらって悪いわね。ちよつと裕也くんと桜内くんに頼みたいことがあってね」

美夏「美夏は必要ないと言っている」

水越「まあ、そう言わないの」

水越先生はなだめるように天枷に声をかけると、視線を義之に向けた。

水越「えっと、この前ちょっとだけ話したと思うけど、この子。天枷美夏はロボットなのね」

美夏「・・・ふっ」

なぜか天枷は自信満々に胸を張った。

水越「最新鋭・・・とは言ってもちよっと古い技術なんだけど、まあなんて言うか少し特殊な作りになっててね、見ての通り人間となんら変わらない感情や自分の意思を持っているの、まるで人間と見分けがつかないくらいいのね」

美夏「・・・」

裕也「確かに・・・」

天枷は感情をこめて義之を見つめた。

義之「本当にロボットなんですか？」

恐らく当然の疑問だろう。

美夏「貴様っ！ 美夏を愚弄するつもりかっ！」

義之「いや、だって、どこからどうみても人間にしか見えないし」

裕也「まあ、確かに」

美夏「だったら証拠を見せてやろうじゃないか！ このロケットパンチを食らえっ！」

と、天枷は手を突き出すが

水越「付いてないわよ」

美夏「なぜ付けんっ！」

水越「必要ないでしょ」

美夏「むう、これだから人間ってヤツは・・・」

裕也「それにロケットパンチ程非合理的な武装は無いぞ？ 飛ばしてやる間は手が無いから無防備だし、他の武装も使えないし」

天枷はブツブツと文句を呟いている。

水越「まあ、天枷がロボットだってことは間違いないわ。私が保証します。桜内くんや裕也くんが疑問に思うのもわかるけどね」

義之「はあ」

裕也「ふむ」

水越「逆に言えばね、それだけ特殊なロボットなの。だからあそこで凍結されていた、桜内くんや裕也くんも授業で習ったでしょ？」

ロボットにまつわる色んな事件のこと」

義之「ええ、まあ」

裕也「はい」

ふたりは同時に頷いた。

ロボットが人間社会に普及にすることに従って起こった様々な事件をふたりは思い出す。

規制、弾圧、破壊、さらに最近では兵器への違法改造等。

言ってしまうえば人間のエゴ丸出しの事件ばかり。

それもロボットと製作者側からしたら至極傍迷惑なものだ。

水越「ぶつちやけ、この天枷の存在が外に漏れるとやばいんだよね」

美夏「……」

水越「間違いなくスクラップ処分される」

裕也「でしょうね」

水越「私たちはそれを望まないの、んで、天枷は長い間凍結されていたから社会常識に疎い。さらにシステムのにも不安定、言ってみればかなり奇抜な行動を取ることが予想されるのね、だから天枷がロボットだってばれないように誰かにフォローしてもらいたいのよ」

義之「で、それを俺たちに？」

水越「ご名答」

美夏「だから、美夏には必要ないと言っているっ！」

天枷が怒鳴り声を上げた。

美夏「美夏は常識人だしシステムも安定してる。奇怪な行動をとったりもしないっ！」

耳から煙を噴出しながら……

裕也「煙、煙、煙が耳から出てるから」

水越「まったく説得力ないわね。ほら、これで回路を冷やして」
水越先生が、ぽんつと冷却シートを天枷に投げた。

美夏「・・・むう」

渋々と冷却シートを額に張る天枷

水越「ほらね、ロボットだったでしょ？」

義之「え、あ、はい」

裕也「確かに」

耳から煙を出されたら疑うのは不可能だ。

水越「どのみちフォローする人間は必要なの。これは研究所の総意と受け取ってもらって構わない。」

美夏「・・・」

水越「だったら、すでに正体のばれている桜内くんと裕也くん頼むのが手っ取り早いでしょ？」

美夏「それはそうだが」

水越「天枷を起動したのは桜内くんだった。そういうめぐり合わせなんでしょう」

美夏「・・・」

水越「不満かしら？」

美夏「もちろん不満だ、・・・が、水越博士の指示には従おう」

天枷はいかにも渋々といった表情で義之たちを見た。

美夏「が、美夏は別にフォローが必要だとは思ってないからな。人間を信用するつもりもない、だから桜内、貴様は余計なことはするな。美夏が言いたいのはそれだけだ」

と、言い終わると天枷は保健室を出ようとしたが

水越「待った、天枷、今日の放課後グラウンドに来なさい。」

美夏「なぜだ？」

水越「あなたのデバイスを渡すのと、その試験をしたいのよ、わかったわね？」

美夏「・・・わかった」

天枷は早い足取りで保健室を去った。

水越「はあ、やれやれだね」

水越先生は苦笑いしながら肩をすくませた。

裕也と義之の顔に少し苦い表情が出る。

水越「まあ、別に、ずっと一緒に行動してほしいってことじゃないの」

ふたりの顔を見て水越先生が補足する

水越「あの子もバカじゃないし、そうそうばれるようなことはいでしょう、ただね、たまに気にかけてあげて欲しいの、あの子、基本的にひとりぼっちだからね」

水越先生の表情はまるで我が子を見守る母親そのものだった。

水越「で、引き受けてくれる？」

義之「まあ、彼女を起動してしまったのは俺の責任だし、出来る限りのことはしますけど」

裕也「俺も出来る限りはフォローしましょう」

水越「うん。ありがとう」

水越先生は満足そうに笑う

水越「じゃあ、これ」

と、水越先生は机の上から分厚いファイルを義之に渡した。

義之「ん？ なんですかこれ？」

水越「天枷の基本資料。一通り目を通しておいて」

義之「わかりました」

水越「基本的には人間と変わらないから。しかも年頃の女の子のね義之「はあ」

水越「あっち系の機能もちろん完備してるから頑張ればいいことあるかもよ？」

そう言いながら水越先生は笑う。

裕也「あんたは本当に教師か！」

裕也が突っ込みを入れた。

水越「あ、そうそう。あとね、できることなら仲良くしてくれると嬉しいかな、ちょっと色々あってね、今は人間嫌いになっちゃって

るんだけど、あの子本当は素直ないい子だから」

水越先生はふたりを見ながら優しい表情を見せた。

水越「で、早速お願いね、二人とも今日の放課後空けておいてね？」

義之&裕也「わかりました」

そうして、ふたりは教室に戻った。

お願いごと（後書き）

裕也「放課後忘れるなよ？」
義之「わかってるよ」

リリカルなのはハンターズ！！ その1（前書き）

裕也「本編とはまったく関係ないからな！」

作者「あつたら怖いよ・・・」

今回はオマケで短いです。

なるべく連載します

リリカルなのはハンターズ！！ その1

裕也「なんでさ……」

俺は某赤い弓兵の口癖を口走った。

なぜかって？

それはな……

裕也「なんで、ユクモ村に居るんだ俺は……」

なぜかPSPのモンスターハンター3rdの拠点のユクモ村に居たからさ……

D・C?なのは'striker's 漆黒と桜花の剣士 モンスタ

ーハンター3rdver始まり

裕也「やっぱり、ユクモ村だよな……」

俺の目の前にはゲームで見慣れた、あの高い赤い屋根が見えてその煙突からは湯気がモクモクと出ている。

そして俺は装備を確認した。

武器は俺の愛用で太刀の疾風刀（裏月影）だった。

防具はユクモノ天シリーズ、うむこれも俺の愛用だな。

裕也「とりあえず、ギルドに行くか……」

俺は山門をくぐり一番奥に建っているハンターズギルドに向かった。ハンターズギルドとはハンター、要するに狩人たちが依頼を受けたり交流を深める場で温泉も完備しており、狩りの疲れを癒す事が出来る場所だ。

そうしてギルドに近寄ると、何故か騒がしい。

裕也「どうした？」

俺はとりあえず一番近くにいた村人Aに聞いた。

村人A「なんでも、金髪の美少女と茶髪の美少女が居るんだとさ！」

村人Aの男は興奮気味にそう口走った。

裕也「金髪に、茶髪の美少女……」

俺にはそれに該当しすぎる知り合いが居た。

裕也「まさか……」

俺は、もしやと思いギルドに入った。

そして、そこには予想通りの人物達が居た……

裕也「なんでさ……」

また、赤い弓兵の口癖を言ってしまった、……仕方ないかもしれ
ないが……

裕也「なんで居るのさ……」

俺の眼の先には予想通り過ぎる人物が3人居た。

八神はやて

フエイト・T・ハラオウン

高町なのは

の3人がそれぞれゲームで愛用していた装備を付けていた。

俺は思わずorsの格好になってしまった。

フエイト「あれ！？ 裕也!？」

なのは「え!？」

はやて「本当や!！」

あっちも気付いたようだね、行くか。

俺は（心身共に）立て直して3人に近づいた。

はやて「よかつたわ、知り合いがいてくれて」

そう言っつてはやてがこっちに歩いてきた。

装備は弓で凶弓（小夜嵐）

防具はドーベルシリーズ

確かにはやて愛用の装備だ

なのは「うん、本当だよ」

なのはがはやての言葉にうなずきながら歩いてきた。

装備はヘビーボウガンでメテオキャノン

防具はナルガシリーズ

確かになのは愛用だな。

フェイト「よかったよ、本当に」

最後にフェイトが来た。

武器は大剣の王牙大剣（黒雷）

防具はペッコUシリーズ

これはフェイトが愛用してる防具だな。

裕也「とりあえず聞こうか、もしかして気が付いたらここに居たとか？」

はやて「その通りや」

なのは「そうだよ」

フェイト「うん」

なんてこつたい・・・

裕也「帰れるのかな俺達・・・」

それが1番大事だな・・・

そして

フェイト「とりあえずギルドマスターに挨拶しましょうか」

なのは「そうだね」

はやて「せやな」

ギルドマスターとは文字通りそのギルドで一番偉い人物で、確か酒飲み爺さんだったな。

俺はギルドマスターが何時も居る場所を見た。

そこに居たのは・・・

裕也「なんでさーーーーー!!」

なぜか紫色の髪の毛に黄色の眼をした男が居たのだ。

スカリエツティ「ふむ、なんでと聞かれてもな、私がマスターなのだが」

似合わねーーーーー!!

俺は思い切り頭を両手で抱えながら天を見上げた。

フェイト「スカリエツティ先生!？」

はやて「ほんまや!？」

なのは「あれ!？」

やっぱり驚いてるよ……

だってこいつは医者なんだから

そして受付を見ると。

そこに居たのは

裕也「ウエンディにドウエさんにウーノさん!？」

なぜかナンバーズだった……

ウエンディ「おい」

ウエンディは暢気に手を振りながら見てるし

ドウエ「どうも」

ドウエさんは普通に挨拶してるし

ウーノ「……」

ウーノさんはなんか書類仕事してるし!!

いやウーノさんは何時もの感じだけどさ!!

裕也「なんでさ……」

俺は今回で4回目の口癖を言った。

そして

?「にやはは　なーに暗い顔してるのさ!」

後ろには

なのは「芳野学園長!？」

はやて「さくらさん!？」

フェイト「学園長!？」

ほんと、なんでさ……!!

俺は絶叫しながら天を仰いだ……

リリカルなのはハンターズ！！ その1（後書き）

裕也「どうなるんだろこれから・・・」
フェイト「わからない・・・」

追いかけること裕也の実力、そして露見（前書き）

義之「ようやく、放課後だ」

追いかけること裕也の實力、そして露見

義之 side

義之「さてと、放課後だからグラウンドに行くか」

俺は放課後になったのでグラウンドに向かおうとした。

歌声「~~~~~」

義之「……ん？」

歌声「~~~~~」

歌声だ。

廊下には、まだ残っている生徒がいて、結構うるさいのに。

それでも聞こえてくる。

清らかで、澄んだ歌声だ。

義之「どこから聞こえるんだろう……」

俺は、フラフラと誘われるように声を頼って歩きだした。

歌声「~~~~~」

義之「……」

声を辿っていったら、音楽室の前に出た。

歌を歌っているのだから、当たり前といえは当たり前なのだが。

義之「誰か残って歌の練習でもしてるのかな？」

扉が空いている。

俺はそつと中の様子をつかかった。

女の子「~~~~~」

……白河しろかわななかだ。

歌が上手で、顔もスタイルも良くて、学園のアイドルと言われる。全男子生徒の憧れの的の1人だ。(フェイトとアリシアも該当する)

俺はあんまり喋ったことはないが、その人気が相当なものだということとはよく知っている。

それにしても……

義之「噂には聞いていたが、本当に歌が上手いな」

BGMもなにもなしでア・カペラ状態なのに、まったく音階が乱れていない。

高いキーも、微妙なキーもきちんと声が出ている。すごい。

ななか「ーえ？」

義之「あっ！」

目が合った。

途端に、白河が歌うのをやめてしまう。

俺は内心残念に思ったが。

ななか「……………」

義之「……………」

なんだか気まずいので、拍手をしよう。

義之「いやー、すごい。うまい」

ななか「……………」

義之「ごめん。つい君の歌に聴き惚れてしまって」

俺が必死に弁明していると

ななか「義之くん」

なぜか俺の名前を呼ばれた。

義之「え？」

俺は呆気にとられてしまった。

ななか「桜内義之くん、でしょ？」

義之「え……………」

俺のことを知ってるなんてな……………」

ななか「うふふ。さあ、なんででしょう？」

白河はそう言うと、無邪気な笑顔を浮かべた。

ほほう。全男子生徒が夢中になるのがわかるくらい、眩しい笑顔だ。

ななか「義之くんって、いろいろ目立つからね」

その言葉を聞いた俺は納得した

義之「あ、あはは……………」

俺の脳裏に、悪友ふたりの顔が浮かんだ。

確かに、イベントがあるたびに、何かしでかしてるからな。

先生方からも、生徒会からも風紀委員からも睨まれてる。(裕也は例外だが)

そりゃ有名にもなるか……嬉しくないけど。

義之「そういう君は……えっと、白河……さん」

俺は呼び方を気をつけながら言っと。

ななか「ななか」

義之「え？」

俺はいきなりのこととで呆気に取られてしまった。

ななか「ななかでいいよ」

それで呼べるならば呼びやすいけど

義之「いや、えっと」

いきなり呼び捨てつてのも少し気が引ける。

ななか「な・な・か」

更に強く言ってきた……

義之「え〜と、じゃ、ななか」

結局俺が根負けした……弱いな

ななか「はい、よくできました！」

そしてにっこりと笑う。

なんだか不思議な子だな。

学園ナンバーワンの人気者は、実はこんなにも気さくだったんだ。

ななか「で、義之くんはなにしてたの？」

義之「え、俺？俺はグラウンドに行こうとしてただけど、そう

したら、歌声が聞こえてきて、誰かなあって」

俺は質問に返答した。

ななか「わ。そんなに大きな声で歌ってたんだ、わたし」

ななかは、そう恥ずかしそうに言ったが

義之「いや、なんていうか。雑音をすり抜けて聞こえてきたっていうか」

俺は正直に言ったが

ななか「ん？」

どうやら少し分かりにくかったようだ。

意味がわからないのか、ななかが小首を傾げて俺の顔を覗き込んだ。大きな瞳をクリクリさせて、興味津々といった様子だ。

まるで猫みたいだな。

そりゃ、この笑顔でこんな仕草されたら、男としては堪らんだろうな！

義之「上手かったし透き通るような声だから、聞こえたのかな？」

俺は素直な評価を口にした。

ななか「本当に？」

義之「ほんとだよ。なんか感動した」

俺はもう一回言うつと。

ななか「うゝむ」

なにか考えるような表情でつかつかと近づいてくる。

ななか「えいつ！」

義之「へ？」

つて、

いきなりぎゅっと手を握られた。

手のひらに柔らかな感触。

包み込むように温かい。

すぐ側でななかの大きくてきれいな瞳に見つめられ、ドキリと心臓が跳ね上がる。

ななか「・・・」

えつと、どうしると・・・

ななか「ありがとー」

満面の笑顔を浮かべ、そして腕をぶんぶん揺さぶられた。

義之「えつと・・・なに？」

俺は状況が飲み込めなかつたので聞いた。

ななか「握手だよ握手。ふたりの出会いを記念して。よろしくね」
ぺこりと頭を下げるななか。

なるほどね

義之「あ、こちらこそよろしく」

俺はつられるようにして頭を下げる。

そしてふたりに顔を見合わせて、軽く嘖き出した。

ななか「でも、初めてかな？ 学校でそんな風に褒められたの」

義之「そんなことはないだろ」

俺は、ななかの言葉に思わず突っ込んだ。

ななか「ううん。ほんと、ほんと。誰もそんなことちゃんとやってくれないよ？ うん、義之くんが初めて」

自分の言葉に頷くように何度も首を振るななか。

歌が上手いのは学園内の評判になってるくらいだから、そんなはずはないと思うんだけどな。

ななか「自分ではあまりわからないんだけどね。上手いかどうかなんて」

なるほどね、確かに自分では分かりにくいな

義之「すごい上手いよ。絶対音感持つてるんじゃない？ どのキーも外れてなかったし」

これは、本心だった。

息継ぎの場所も、伸びやかなで出しも、まるでプロのシンガーみたいに完璧だった。

同い年で、こんなすごい才能持つてる子がいたなんて。

ななか「いやー、それほどでもー」

ななかは赤くなって照れながら、頬をぽりぽりと掻いた。

ななか「でも、そういうのがわかるってことは、義之くんも歌が上手なんだね？」

義之「いや、俺は歌っていうよりは……その、ちょっと、ギターとかやってたから」

俺は内心恥ずかしいが暴露した。

ななか「わ、本当？ ん？ やってた……って、今は？」

ななかはどうやら興味を持ったのか聞いてきた。

義之「やってるよ。独学で趣味程度なんだ。バンドとかやってないから」

そう、俺のギターは独学だから人前で披露するほどではない
ななか「へー、すごい。じゃあ、曲とか弾けたりしちゃうの？」

義之「うん、まあ。譜面は読めるし、耳コピもある程度なら」

これは、俺の数少ない特技のひとつだ。（料理は別で）

ななか「わー！ それってすごいかもー！」

ななかは、何が嬉しいのか俺を楽しげに見つめ、しきりに頷いていく。
る。

義之「いや、ほんとに興味みたいなものだから・・・」

俺は正直に言った。

ななかにそんな風に言われるとなんだか恥ずかしくなってくる。

ななか「でもでもでも、ほら、義之くんって見た目が格好いいじゃない？」

臆面も無くまたそんなことを言う。

つてか、疑問系で聞かれても返答に困るし。

ななか「その上ギターまで弾けるなんてますます格好いいなあって思ってたさ」

義之「かつこいいかあ？ たかがギターできるくらいで」

ななか「かつこいいよー。わたしは歌は歌えるけど、楽器はあまりできないから。なんか羨ましいな」

義之「歌が上手いほうがいいよ、あ、そうなると両方できる奴が一番格好いいのかな？」

ななか「あははは、そうかもしないね！」

音楽の話は、誰かとちゃんとしたのはこれが初めてかも知れない。

涉たちとはたまにするけど、すぐバカ話になるし。

音姉おとねえと由夢ゆゆめは、弾いてる音くらいは聴いたことあるだろうけど・・・

音楽の話はほとんどしなかったしな。

ななかとは初対面みたいなものだが、こうやって音楽の話ができて

ちよつと嬉しいぞ。

ななか「じゃあさ、あの曲知ってる？ 最近よくテレビのCMに使われてる……」

ん〜と、ななかは思い出そうとしている

ななか「なんだっけ、携帯のCMのー、うーんと」

俺はそれを聞いて分かった

義之「ああ、『オレンジランチ』の新曲だろ。ちよつと切ない感じの」

それを聞いたななかは両手をパンと叩いて

ななか「そうそう！ あの曲いいよねー」

義之「確か、もうちよつとしたらアルバムが出るんじゃないかな」
な

俺は音楽雑誌の情報を思い出しながら言った。

ななか「ほんとー？ わあ、買おうかなあ、あーでも、お小遣いち

よびつとピンチだし。んー、どうしよ〜」

義之「ああ。俺、買う予定だから、後で貸してあげるよ」

ななか「ほんとに？ 絶対だよ？ 約束だよ？」

音楽の話は尽きない。

だがその時、音楽室の扉が遠慮なく開いた。

男子1「……………」

女子1「……………」

なんだ？

知らない生徒が数人、音楽室を見回している。

軽音楽部の連中ではなさそうだが。

ななか「あ、やばい」

義之「え？」

ななかは何故か俺の背後に隠れた。

義之「なに？」

俺は確認のために背後のななかを見た。

ななか「し〜っ」

義之「？」

男子2「白河さん見つけました」

ななか「あちゃ〜！」

ななかは、驚いてピョンと跳ね上がると、俺の腕を引っ張った。

義之「な、なに、なに？」

ななか「逃げるよ！」

なんでさ

ななかは、言い出すと同時に走り出した。

そして、立ちほだかる知らない生徒達の間を、俺を盾にしてすり抜けていった。

義之「あ、あのーっ？」

ななか「えへへへ」

俺はななかにされるがままに走った。

すると

小恋「え！？ ななか！？ わ！ 手芸部！？」

小恋がこっちを見て驚いていた。

なに？ 手芸部だと？

その手芸部（？）の連中は両手を広げて俺たちの前に立ちほだかる。

ななか「ごめんね〜、小恋！」

そうして、俺たちは校舎内を走り回って逃げ回った。

義之「なあ、こっちつて確か」

ななか「うん、やばいかも」

俺たちは手芸部の連中から逃げ回り気付いたら生徒会室の近くに來ていたが。

男子1「こっちに逃げたぞ！」

女子1「反対側からも追ってる！ 追い詰めたわ！」

どうやら挟撃されたようだ。

俺たちが迷っている。

ガラッ！

生徒会室のドアが勢い良く開いて

義之「うお！」

ななか「うきゃ！」

中から手が伸びてきて、俺たちを生徒会室に引きずり込んだ。

男子1「あれ？ 何処に行った？」

女子1「すぐ近くに居るはずよ！」

そう、ドア越しに聞こえると数人の足音は遠ざかっていった。

？「まつたく、俺の予想通りに来たから助かったな」

俺は、その声を聞いて後ろを見ると

義之「裕也！」

俺たちを助けたのは親友の防人裕也だった。

義之 side END

裕也 side

裕也「なんだか、騒がしいな」

俺は、放課後になってもなかなかグラウンドにこない義之を探すために校舎に戻ったが、なんか騒がしかった。

すると

男子3「どうやら本校校舎に行ったようだ！」

女子2「私達も応援に向かうわよ！」

俺は横を見ると、そこを数人の男女が走っていく、その顔に見覚えがあった。

裕也「ありゃ、手芸部だな、……もしかして」

俺は予想した

裕也「白河ななかな」

白河ななか、風見学園のアイドルと名をはせている美少女だ、その白河嬢に対して激しくアプローチをしているのが手芸部の連中だ。

裕也「もしかして、巻き込まれたかな？」

俺は逃走ルートを予想した、さっき本校校舎と聞こえたから、恐らく2階の渡り廊下から入ったのだろう

裕也「ふむ、ならば・・・」

俺はとある場所に向かって走り出した。

俺が生徒会室のドアの近くで待っていると

義之『なあ、こっちって確か』

ななか『うん、やばいかも』

義之たちの声が聞こえた。

ドンピシャ！

俺は内心ガッツポーズをしてドアを一気に開けた。

義之「うお！」

ななか「うきや！」

少し乱暴かもしれんがご愛嬌で

俺はふたりを引き込むとドアを一気に閉めた。

男子1『あれ？ 何処に行った？』

女子1『すぐ近くに居るはずよ！』

そう聞こえると、数人の足音が遠ざかっていった。

裕也「まったく、俺の予想通りに来たから助かったな」

俺がそう言っていると、義之がこっちを見た。

義之「裕也！」

裕也「よ、まったく厄介ごとに巻き込まれてたか」

義之は立ち上がって白河嬢に手を差し伸べた。

ななか「裕也って、もしかして、防人裕也くん？」

白河嬢が俺を見て少し驚いている。

裕也「ああ、そうだ、初めましてだな、白河」

俺は軽く頭を下げて挨拶した。

ななか「へー、君がかの有名な剣使いなんだ」ソードダンサー

裕也「ふむ、その名前も結構有名になってしまったな、まあそういう君は歌ノ天使だったか」セイレーン

歌ノ天使とは白河嬢の二つ名だ。セイレーン

義之「で、なんでここに居るんだ？」

義之は俺に聞いてきた

裕也「あのな、お前がグラウンドに来ないから捜しに来たら、手芸部の連中が騒がしかったから、先回りしたんだよ」

義之「うお！ 忘れてた！！」

こいつ、殴つたらうか

ななか「巻き込んだじゃったみたいで、ごめんね」

白河嬢はかわいく謝ってきた、なるほどこれならば確かにアイドルと呼ばれるだろうな。

裕也「少し待て、まだ居るようだ」

外ではまだ走ってる足音が聞こえる。

ななか「あちゃー、しつこいなー」

白河嬢が困ってるな、ふむ

裕也「少し待ってる」

俺はドアを開けて外に出た。

裕也「先ほどから騒がしいぞ、廊下を走るな」

男子2「す、すいません」

女子2「あ！ もしかして剣使いですか！？」ソードダンサー

裕也「そうだが」

女子2「お会いできて光栄です！ 握手いいですか？」

裕也「構わんが」

女子2「やった！」

ふむ、いわゆるファンと言う奴かな？

裕也「で、先ほどからなにを騒いでるのかな？」

男子1「はい、白河さんを捜してるんです、見ませんでしたか？」

裕也「白河ならば先ほど上に向かったようだが？」

男子2「ありがとうございます！」

男子1「よし！ 向かうぞ！」

男子生徒がそう言うのと全員走り去った。

裕也「だから、廊下は走るなど言ったただろっが・・・」

まあ、これで目的は果たせたが

裕也「もう、いいぞ？」

ななか「助かった、ありがとうね」

裕也「構わん、帰るならば今のうちだぞ」

ななか「そうするね、じゃあね」

俺と義之は白河嬢を見送るとグラウンドに向かった。

第3者 side

水越「ようやく、来たわね」

グラウンドには既に水越先生と天枷が待機していた。

グラウンドの一角は障壁が張られている。

義之「すいません」

裕也「では、始めましょうか」

水越「ええ、天枷、これがあんたのデバイスのクロスよ」

水越先生は白衣のポケットから深い蒼の珠がついたネックレスを取り出して、天枷に渡した。

美夏「これが、デバイスか、小さいな」

天枷はデバイスを見て驚いている。

水越「それはただの待機形態よ、それを胸の高さに持って、『クロス、セットアップ』って試してみなさい」

天枷はその通りに胸の高さに持って。

美夏「クロス、セットアップ！」

すると、次の瞬間にはバリアジャケットが展開していた。（詳細は設定参照）

水越「どう？ 違和感はない？」

天枷は色々動かして確認している。

美夏「無いな」

水越先生はそれを満足そうに聞いて

水越「そう、天枷、あんたにはリンカーコアが無いから、そのコアには特殊な機構を使ってあんたでも魔法が使えるようにしたの、でそれはあんたが視認した魔法をデバイスに登録してストックするの、本当だったらインテリジェンスデバイスにする予定だったけど、搭載予定だったAIのMIAKIが起動しないから外したのだから・・・」

水越先生は説明を始めた。

以下略（詳細は設定参照）

水越「さてと、説明も終わつたし、デモンストレーションを始めましょうか、裕也くんお願いね？」

裕也「はい」

裕也は素手で障壁内に入った。

障壁の大きさは広大なグラウンドの半分以上を包み込んでいる。

水越「さて、ガジェットの数はどうする？」

ガジェットとは正式名称をガジェット・ドローンと言い、AI制御の無人機で警備などに用いられる。

型式によって性能が違い、現在3種類あるがもっとも使われているのが1型で楕円形のボディをしている。

裕也「お任せします」

水越「そ、じゃあ数は50で」

水越先生は手元の携帯端末を操作した。

義之「ちよ！？ 50ってAMFもハンパないですよ！？」

義之は出現した数を見て驚愕した。

美夏「AMFとはなんだ？」

水越「AMFってのはね、正式名称はアンチ・マジリング・フィードって言うてね、まあ要するに魔力が練りにくくなるのよ、簡単にいうとジャミングね」

美夏「ふむ、要するに魔法が使いにくくなるわけか」

水越「その通りね」

義之「ちよつと、大丈夫なんですか!？」

義之は落ち着いている水越先生を見て少し不安げに聞いた。

水越「大丈夫よ、忘れたの？ 彼は”学園最強”なのよ？」

美夏「なに？ 学園最強？」

義之「ああ、あいつは付属生なのに本校生を差し押さえて総合ランクトーナメントで優勝したんだ」

天枷の質問に義之が返答した、その時だった。

裕也「ホーロス・ホーロロ・ホーロギオン」

裕也の声が聞こえた

義之「え？ あれは西洋魔法の始動キー？」

水越「へんね？ 彼なら魔法の射手^{サギタ}くらいなら、無詠唱で使えるでしょうに」

義之と水越先生が不思議そうに首を傾げると

裕也「契約に従い、我に従え、高殿の王」

義之「なに!？ あれはまさか!！」

水越「最大級呪文!？ 本校生でも使えるのは数人だけなのに!」

裕也「来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷でい。百重千重と重なりて、走れよ稲妻!！」

水越「やば! 障壁最大出力!! 天枷、あんたは対閃光フィルタ

! カメラが焼けるわよ!！」

義之「うお!」

裕也「千の雷!！」

裕也が上げていた手を振り下ろすと

とてつもない閃光と共に数えるのが馬鹿馬鹿しい雷がガジェットに降り注ぎ全て熔けた。

裕也「しまった、やりすぎたかも・・・」

その声が聞こえたのは数秒後だった。

水越「あんたね、使うならいいなさい！」

義之たちの居る位置に歩いて戻ってきた裕也に水越先生が怒っていると

義之「おい、裕也、左手から出血してる」

と、義之が指を挿した。

裕也「む？」

裕也は自分の腕を見て多少驚いているようだ。

水越「・・・」

水越先生の眼が細くなる。

水越「天枷、コロシアはちゃんと起動してる？」

美夏「む？・・・ああ、大丈夫だ」

天枷は自分のデバイスの手の甲を見る、そこには3つの宝石みたいなものが着いており、右手の真ん中の宝石が黄色く光っている。

これがストックした証だ。

水越「そう、桜内くん、悪いけど後お願いできる？ わたしは裕也

くんの手当てるから」

水越先生は手短に確認すると義之に聞いた。

義之「あ、はい。大丈夫です、魔法を使えばいいんですね？」

義之は頷き、要点を確認した。

水越「ええ、お願いね、裕也くん来なさい、手当てるから」

そう言うとき水越先生は裕也を伴い保健室に向かった。

水越「はい、そこに座って」

裕也「・・・」

裕也は無言で指定されたイスに座った。

水越「裕也くん、スカリエツテイ先生に話は聞いてるわ、あんまり無理しないの、あんただでさえ寿命削って短いのに」

裕也「……………」

裕也は制服の上着を脱いでから、ワイシャツを脱いだ。

そこは先日戦闘で撃たれた場所だった。

今回最大系呪文を使った反動で出血したようだ。

水越「うーん、これはわたしだけでは無理ね、シャマル手伝って？」

水越は奥に向かって声をかけた。

？「はい」

奥から若い女性の声が聞こえて、姿を現した。

その姿は肩の辺りで切りそろえた金色の髪に灰色に近い紫色の瞳に優しい微笑みの女性だった、名前はシャマルと言い、シグナムと同じくはやての所持している魔導書の「夜天の書」の守護騎士プロゲラムの1人だ。

シャマル「治療しますから、動かないでくださいね」

シャマルの領分は戦闘よりも治療や索敵といった裏方を本領として
いる。

裕也「すまん」

水越「ワイシャツと制服の上着はそこに予備があるから使いなさい、ワイシャツは上げるから、上着はクリーニングして返してね」

裕也「わかってますよ」

裕也はシャマルに治療されながら返答した。

水越「今は守護者ガーディアンにはあんたしか居ないんだから、無理しないでね？」

裕也「……………」

水越「あんたが死ぬと悲しむ人が居るんだからね？」

裕也「はい……………まあ少ないでしょうけどね……………」

裕也は自虐的に笑った。

第3者 side (別視点)

廊下の保健室の前で固まってる1人の影があった。それは金髪を腰まで伸ばしており髪先で黒いリボンで纏めた美少女だった。

腕には生徒会を表す白い腕章を着けている。

フェイト「……裕也が、ガーディアン守護者？」

フェイトの言葉は震えていた。

フェイト「しかも、寿命が短い……？」

フェイトは自分の言葉が信じられない思いだった。

フェイト「……どうして？」

その言葉には誰も答えなかった。

追いかけること裕也の實力、そして露見（後書き）

フエイト「……………どういうことなの？」

後書きコーナー（題名は仮）

義之「よ。読者の皆様、ここで会うのは初めてだな、主人公その1、桜内義之だ」

裕也「同じく、主人公その2、防人裕也だ、よろしく」

義之「さて、始まったのはいいけど」

裕也「作者が来てないからな、どうするか」

作者「悪い、遅れた、作者の京勇樹だ」

裕也「遅いぞ」

義之「まったくだ」

作者「すまん、少し用意するものがあつたからな」

裕也「そうか」

義之「で、作者よ、このコーナーの趣旨はなんだ？」

作者「うむ、このコーナーは読者からの各キャラへの質問や、言わせたいセリフなどを受け付けます！」

裕也「要するになんでもコーナーか」

作者「うむ！」

義之「まあ、今回は初めてだから無いけどな」

作者「だから、今回はお前らにやってもらっぞ」

義之「あいよ」

作者「今回は義之に言ってもらっぞ」

義之「わかった」

では、スタート！

義之「歯あ喰いしばれよ最強、俺の最弱は、ちつとばっか響くぞ」

はい、終了！

作者「どうだった？」

義之「気合がいる言葉だな」

裕也「確かに」

作者「まあ、知ってる人は多いかもな、これは『とある魔術の禁書
目録』の主人公の上条当麻が言ったセリフです、ボロボロになりながらも目的のために決して倒れずに言ったセリフだ」

義之「なるほどな」

裕也「さて、今回はここまでとしようか」

全員「」「また、次回までさよーならー！」「」

このコーナーでは、言わせたいセリフや質問等を受け付けます！
セリフを言わせる場合は、言わせたいセリフ、セリフの原作、言わせたいキャラを書いてください。

質問は、質問内容と質問するキャラを書いてください。

応募待っています！！

幕間 由夢の夢

休日の朝7時、私は飛び起きた。

由夢「あれって、どういうこと?」

”それ”は、私が見た夢が原因だった。

私には特殊な能力が備わっている。

それは、確定未来視だ。

しかも、それは夢という形で見るのだ。

私は見た夢を思い出した。

それは、裕也さんとフェイトさんが居た。

しかし、それは平和とは懸け離れた夢だった。

見たのは力なくまるで死んだ様に倒れてる裕也さん

そして、倒れてる裕也さんの頭を抱きかかえながら泣き叫ぶフェイト先輩

ト先輩

そして、焔に包まれている初音島

あれはまるで

由夢「戦争みたい・・・」

私は小さく言った。

けれど、信じられなかったのは

由夢「裕也さんの左目の眼帯が外れてた?」

裕也さんは普段から左目に眼帯をしている。

けれど、威圧感や怖さなどはなく、優しい雰囲気がある。

しかも、裕也さんの左目が納まつてるはずの場所には何もなかった。

いや、あったのだが、消えたのだ。

由夢「あの、金色の眼はなに?」

消える瞬間、私はその眼の色を見た。

裕也さんの眼の色は黒のはずだ。

けど見えたのは、金色だった、しかも

由夢「光ってた?」

そう、その金色の眼が煌々と光っていたのだ。

まるで、代償を受け取りその分力を分け与えているかのように。

由夢「裕也さんが、死ぬ？」

なんで？

どうして？

私は、起きてからしばらくの間その思考の迷路に捕らわれていた。

幕間 由夢の夢（後書き）

由夢「どうして？」

今回は後書きコーナーは割愛します。

どしどし応募してください！

キャラへの質問や言わせたいセリフなどお待ちしています！

質問は質問内容と質問するキャラの名前を書いてください。

セリフを言わせる場合は、言わせるセリフとセリフの原作と誰が言

ったか、そして言わせたいキャラを書いてください！！

お待ちしております！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4465y/>

D・C?なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士

2011年12月16日02時48分発行